

大願憲海と長谷川家の粉本

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000547

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



大願憲海と長谷川家の粉本

松尾 芳樹

幕末期に六角堂能満院の住職となり、仏画制作と出版を行う工房を主宰した大願憲海は、一時山王寺に寄宿し、弟子とともに長谷川家の所蔵する粉本を写した。この長谷川家は桃山時代の画家長谷川等伯の息子宗也の末裔である。宗也から明治期の等宗に至る江戸時代の長谷川家については、従来注目されることが少なかったが、諸記録の発見により徐々にその系譜が明らかとなってきた。能満院旧蔵の長谷川家関係粉本からは、彼らが絵仏師として広い活動範囲を持ち、曼荼羅の制作も行う専門的な工房であった様子がうかがえる。憲海は青年期に長谷川家の絵師や粉本と出会っており、後に能満院工房を開くにあたり、長谷川家から学んだことを活用したと考えられる。

主要項目：六角堂能満院 山王寺 大願憲海 長谷川等伯 長谷川宗也 長谷川家 絵仏師
粉本

Daigan-Kenkai and the Painting Examples of the Hasegawa Family

By Matsuo Yoshiki

Daigan Kenkai assumed the position of master of Rokkakudo Noman' in temple at the end of Edo period and ran a studio for Buddhist painting and publishing. He boarded at Sanno-ji temple for a while in order to copy with the painting examples housed by Hasegawa family. This Hasegawa family is the descendant of Soya, the son of Hasegawa Tohaku a painter in the Momoyama period. So far, the family between the era of Soya and Toshu, who lived in Meiji era, has got less attention. By virtue of recent discoveries, however, the family history has become increasingly clear. Painting examples related to the family housed at Noman' in temple imply that the family was involved actively in wide range of activities as a troupe of religious painters; they were producing Mandala at their special studio. Kenkai had encountered painters from the family and their painting examples during his adolescence. It is considered that Kenkai utilized what he learned from the Hasegawa family when he himself opened his studio at Noman' in temple.

Key Term : Rokkakudo Noman' in temple, Sanno' ji temple, Daigan Kenkai,
Hasegawa Tohaku, Hasegawa Soya, the Hasegawa family,
religious painters (ebusshi), painting examples (funpon)

1. はじめに

幕末期の真言僧憲海⁽¹⁾が弟子大成⁽²⁾とともに会津を離れ入洛した際、六角堂能満院に入る直前に当座の拠点としたのが、室町通仏光寺にあった山王寺⁽³⁾である。この山王寺寄寓期に憲海らは、長谷川家所蔵の粉本を精力的に収集した。憲海は弘化4年(1847)から嘉永3年(1850)までの約3年間山王寺に滞在したと考えられ、弟子大成と現光⁽⁴⁾を含めた三人が、烏丸通仏光寺近くに住んでいた長谷川家の所蔵する粉本を模写したのである。

この期間の年紀を記す長谷川家関係粉本だけで129点あるが、他に山王寺寄寓期の制作と推定できるが年紀を欠くものや、能満院への移転後に長谷川家粉本を模写したもの、また憲海の長谷寺修学時代に模写したものなど、長谷川家に関する粉本は白描180点、版画2点を数える(表1)。彼らは長谷川家の模本をしばしば長谷川本と呼んだ。憲海らが仏教図像を収集する過程で、これほど大量の粉本を一箇所で収集した例はなく、特別な理由があったと思われるが、その経緯を物語る資料はない。

この長谷川家は、桃山時代の画家として知られる長谷川等伯(1539 - 1610)の末裔である。長谷川等伯については、近年急速に研究が進展をみせているが、その画系について論じられるのは未だその弟子や子の世代にとどまっているのが現状であり、江戸時代後期の世代に至っては断片的な情報が知られているにすぎない。嘉永年間に編集された『古画備考』においても等伯の孫以降の長谷川家画家についての記述は極めて断片的である⁽⁵⁾。こうした状況はその後大きな変化はみられず、画史からは長く忘れられた存在となっていた。それが昭和戦後期になると、土居次義氏及び山根有三氏の論考⁽⁶⁾により等伯の末裔について言及されることも増し、江戸時代の長谷川派についての研究基盤はようやく整い始めたといえる。近年では宮島新一氏の著作⁽⁷⁾により一般にも紹介されるようになり、徐々に江戸期の長谷川家の事跡が歴史の視界に入りつつある。

憲海らが収集した長谷川家に関する粉本には、原粉本の墨書を書写して長谷川家の活動を記録するものがあり、そこには原本の所在や、注文者の情報や、書写年および書写者などが書き込まれている。これらは、江戸後期における絵仏師長谷川家の事跡を記録する興味深い資料として注目される。

憲海は青年時代の長谷寺修学中に長谷川家の手になる粉本を再三模写しており、その存在を早くから意識していたと見られる。晩年の憲海が図像収集の大願を期して京都に入った時、長谷川家は数少ない洛中の知己であった。18世紀から19世紀にかけて長谷川家が絵仏師として京都において存在感を示していたことは、これから新たな事業を立ち上げようとする憲海に、少なからぬ影響を与えたものと考えられる。

本稿は、憲海の京都における活動に深く関わった近世の長谷川家の動向について、彼らの系譜を検証するとともに、憲海らが記録した長谷川家関係資料が示す内容を踏まえてその活動について考察し、能満院における憲海の事業への影響を論じるものである。

2. 長谷川家の系譜

江戸時代後期における長谷川家の活動を明確に伝える記録として流布するものは少ない。近世末期の認識を示す『古画備考』の記述を例にあげるまでもなく、きわめて限られたものといわざるをえない。長谷川家の系譜に関する資料として最も古いのは、本法寺日通（1551-1608）が等伯の語るところを記述した『画説』に記されたものである⁽⁸⁾。同書には二件の系図状の図が示されているが、これには雪舟と等伯の関係を記述する以外の意図は見られない。ただ、晩年に等伯が「自雪舟五代」を名乗るようになる根拠の一端を記すものとして重要である⁽⁹⁾。

従ってここで論じる主題において基本資料となるのは、長谷川家の系譜としてすでに公刊されている三種の系譜と京都の仲家が所有する『長谷川家過去帳』である。近世の長谷川家の動向をうかがわせる数少ない資料を検証するところから、長谷川家系譜の考察をはじめたい。

最初に『七尾町旧記』に収録された長谷川家系譜をあげる。大正初期に発見されたと考えられている資料⁽¹⁰⁾で、能登七尾に住んだ等林が文化6年（1809）に記したとされる。等伯よりはじまり、彼の三男宗也以後に連なる京都の長谷川家について、当代にあたる長谷川等鶴までを略述する。「自雪舟五代」を意識した等伯以後の累代の継承については記述がない。等伯については、狩野祐雪（? - 1543）の弟子となり、その没後山口の雲谷等益（1547 - 1618）の弟子となったという伝を伝える。等林は七尾の本延寺の檀家とされるが、仲家が所有する『長谷川家過去帳』にもその名があり、そこに京都の本法寺⁽¹¹⁾に葬られたことが記されているので、京都とつながりの深い人物であったことが推測される。本法寺を本寺とする本延寺は日蓮宗の寺院で、等伯の生家たる七尾の奥村家の檀那寺である。本系譜の記述は簡略であり、もともと忘備録あるいは略本として記述されたものと思われる。等林自身が記した原本は残っておらず、これを収録した『七尾町旧記』そのものが原本を失い、写しを残すのみである。以下この系譜を旧記本系譜と呼ぶことにする。

ちなみに、ここに提示した『長谷川家過去帳』は長谷川等伯の画系を継承する京都の仲家が所有するもので、雲母引きの紙を用いた折帖の体裁を採っている。宗也以後宗清に至るまでの長谷川家の檀那寺であった信行寺⁽¹²⁾で発見されたもので、等伯の長男久蔵（1568 - 1593）が亡くなった文禄2年（1593）以後明治26年（1893）までの京都の長谷川家の縁者について、忌日を書き留めている（表2）。

その序⁽¹³⁾によれば、天明8年（1788）の大火で焼失したものを、他の過去帳から謄写したものらしく、後に述べる仲家本《長谷川家系譜》と同様の成立状況がみられる。何から謄写したか記述した部分は欠失しているため判然としないが、長谷川家の旧檀那寺である本法寺教行院の過去帳とは記述の一致が見られ、各檀那寺の過去帳から謄写したものと推測される。したがって、転載の過程で記載漏れ、誤記が発生する可能性は避けられない資料であるが、墓碑の多くが失われた現在、極めて貴重な記録である。

次にあげられるのが、京都の仲家が所蔵する《長谷川家系譜》⁽¹⁴⁾である。これは、卷子に仕立てられており、巻首に記される序により伝来の経緯がわかる。すなわち、はじめ等伯の孫にあたる宗雪が作成したが、この最初の系譜は天明8年の大火で焼失した。ところが、宗雪の孫

表1 能満院旧蔵粉本長谷川家関係資料

通番	名称	材質技法	員数	制作者	制作年		制作日	法量(縦)cm
1	金剛界曼荼羅月輪花瓶文様帯等図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	28.2
2	金剛界曼荼羅四方蓮華文図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	17.3
3	金剛界曼荼羅縮図界線図	紙本白描	1帖(4紙)	大願	文政9年	1826	07_15	40.6
4	金剛界曼荼羅賢劫十六尊地文様図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	106.3
5	金剛界曼荼羅界線文様帯等図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	28.1
6	金剛界曼荼羅四供養菩薩雲図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	28.0
7	金剛界曼荼羅外縁文様帯図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	27.9
8	金剛界曼荼羅外縁隅文様帯図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	40.5
9	金剛界曼荼羅界線文様図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	80.6
10	胎藏界曼荼羅光背地文図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	14.0
11	牡丹唐草文図	紙本白描	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	33.6
12	金剛界曼荼羅蓮華草図等袋	紙本墨書	1枚	大願	文政9年	1826	07_15	30.2
13	毘沙門天曼荼羅図(中)	紙本白描	1枚	大願	文政12年	1829	05_21	149.4
14	毘沙門天曼荼羅図(右)	紙本白描	1枚	大願	文政12年	1829	05_21	158.3
15	毘沙門天曼荼羅図(左)	紙本白描	1枚	大願	文政12年	1829	05_21	158.1
16	孔雀明王像	紙本白描淡彩	1枚	大願	文政12年	1829	06_18	164.2
17	天蓋・宝冠・龍・飛龍図卷	紙本白描	1卷	大願	天保2年	1831	10_02	27.9
18	龍図	紙本墨画	1枚	大成	弘化4年	1847	06_23	39.0
19	大威徳明王像	紙本白描一部朱描	1枚	現光	弘化4年	1847	06_29	165.2
20	蓮池図	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	06_30	38.9
21	十二天図(右)	紙本白描	1枚	大願	弘化4年	1847	07_02	148.5
22	十二天図(左)	紙本白描	1枚	大願	弘化4年	1847	07_02	133.0
23	訶利帝母像	紙本白描淡彩	1枚	大願	弘化4年	1847	07_02	151.8
24	俱利伽羅剣図	紙本白描	1枚	大願	弘化4年	1847	07_03	68.8
25	愛染明王像	紙本白描	1枚	大願	弘化4年	1847	07_03	96.4
26	五大明王像	紙本白描朱彩	1枚	現光	弘化4年	1847	07_03	192.0
27	辨才天十五童子像	紙本白描	1枚	大願	弘化4年	1847	07_04	112.0
28	不動明王二童子像	紙本白描部分淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	07_05	134.0
29	五大明王像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	07_05	116.2
30	金剛童子像	紙本白描	1枚	大願	弘化4年	1847	07_05	92.3
31	摩多利神像	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	07_05	77.5
32	愛宕権現像	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	07_30	90.8
33	九頭龍権現像	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	07_30	137.5
34	高野四社明神図	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	08_01	112.0
35	山王曼荼羅図	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	08_02	105.0
36	祇園神像	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	08_03	85.6
37	高野四社明神図	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	08_03	102.8
38	龍王像	紙本着彩	1枚	大成	弘化4年	1847	08_03	44.1
39	内裏雛図	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	08_03	46.5
40	光明真言字輪曼荼羅図	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	08_09	76.5
41	胎藏界大日如来像	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	08_09	72.6
42	灑水観音像	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	08_10	140.8
43	役行者像	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	08_10	93.7
44	五髻文殊菩薩像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_11	65.2
45	虚空蔵菩薩像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_11	152.5
46	普賢延命菩薩像	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	08_12	60.8
47	五髻文殊菩薩像	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	08_12	114.0
48	虚空蔵菩薩像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_12	130.0
49	山越阿弥陀如来像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_15	114.0
50	阿弥陀三尊来迎図	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_16	114.2
51	阿弥陀如来像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_20	186.0
52	阿弥陀如来像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_21	115.0
53	阿弥陀三尊来迎図	紙本白描	1枚	大願	弘化4年	1847	08_21	110.7
54	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_22	70.8
55	勢至菩薩像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_23	113.0
56	阿弥陀三尊来迎図	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_24	87.2
57	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_26	73.1
58	地藏菩薩矜羯羅制吒迦像	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	08_27	93.4
59	地藏菩薩像	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	08_28	106.0
60	地藏菩薩像	紙本白描	1枚	大成	弘化4年	1847	08_28	37.7
61	地藏菩薩像	紙本白描淡彩	1枚	大成	弘化4年	1847	08_29	89.4
62	釈迦十六善神図	紙本白描	1枚	現光	弘化4年	1847	09_01	146.6

法量(横)cm	印章	長谷川家関係備考	収蔵番号*1	図録番号*2
79.2		長谷川等鶴写本	130020970101	聚成-1008
36.2		長谷川等鶴写本	130020970102	聚成-1009
27.8	B印	長谷川等鶴写本	130020970103	聚成-1010
28.0	B印	長谷川等鶴写本	130020970104	聚成-1011
82.0		長谷川等鶴写本	130020970105	聚成-1012
40.6	B印	長谷川等鶴写本	130020970106	聚成-1013
69.3	B印	長谷川等鶴写本	130020970107	聚成-1014
38.2	B印	長谷川等鶴写本	130020970108	聚成-1015
13.9	B印	長谷川等鶴写本	130020970109	聚成-1016
24.3	B印	長谷川等鶴写本	130020970110	聚成-1017
48.7		長谷川等鶴写本	130020970111	
20.1		長谷川等鶴写本	130020970112	聚成-1017A
60.4	C印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)(於花山元慶寺), 長谷川喜右衛門図(寛延3:1750) 摂州北山本山寺へ松平資訓寄附	130020041201	聚成-1069
60.1	C印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)(於花山元慶寺), 長谷川喜右衛門図(寛延3:1750) 摂州北山本山寺へ松平資訓寄附	130020041202	聚成-1070
60.9	C印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)(於花山元慶寺), 長谷川喜右衛門図(寛延3:1750) 摂州北山本山寺へ松平資訓寄附	130020041203	聚成-1071
125.0		長谷川等鶴(賀一)写本(享和元:1801), 原本智積院方丈	130020320100	聚成-2179
864.5		長谷川等鶴写本	130020970600	聚成-4125
83.5		長谷川等叔図(紀州南龍院御堂屋天井雛形)	130020931000	聚成-4143
94.7		長谷川等叔(賀一郎)写本	130020330800	聚成-2162
106.3		長谷川等叔図?	130020950100	
60.3	D印	長谷川氏本	130020420302	聚成-2251
59.5		長谷川氏本	130020420301	聚成-2252
82.2		長谷川等鶴(等廓)写本(文化2:1819)	130020400300	聚成-2221
38.4		長谷川氏本	130020307100	聚成-2157
62.2	A印	長谷川氏本(天保7:1836), 原本今里妙法寺什宝, 備前連嶋宝嶋寺注文	130020310400	聚成-2175
85.5		長谷川等叔(賀一郎)図, 加賀藩注文, 金沢宝集律寺取次	130020340200	聚成-2172
44.5		長谷川等叔写本(天保10:1839), 原本比叡山薬樹院藏本(裏書兆殿司筆南都興福寺什宝)	130020381800	聚成-2214
88.8		長谷川氏本	130020301000	
43.7		長谷川氏本	130020340400	聚成-2170
51.2		長谷川氏本	130020341800	聚成-2183
60.1		長谷川氏本	130020611400	聚成-4062
38.6		長谷川氏本	130020550100	聚成-4083
53.5		長谷川氏本	130020601300	聚成-4065
78.2		長谷川氏本	130020570600	聚成-4052
39.1		長谷川氏本	130020560400	聚成-4002
45.0		長谷川氏本	130020460700	聚成-4074
46.8	A印	長谷川等叔図	130020570700	
27.5		長谷川氏本	130020661000	
62.2		長谷川氏本	130020891100	
60.5		長谷川数馬図(文化15:1818), 備陽玉泉寺注文	130020031400	聚成-1020
63.1		長谷川等舟図(天保14:1843), 大和小泉庚申堂注文	130020090900	聚成-1022
58.5		長谷川等叔図	130020240300	聚成-2040
60.0		長谷川氏本(長谷川等叔写本?) (天保8:1837), 原本泉州花林寺什物	130020710100	聚成-3048
43.6		長谷川氏本, 宝嶋寺注文	130020124000	聚成-2053
132.7		長谷川等叔図, 叡山西塔金光院注文	130020261900	
26.8		長谷川氏本	130020111300	
74.3		長谷川氏本(長谷川等叔図?)	130020121900	聚成-2052
97.5		長谷川等鶴図	130020261800	聚成-2085
99.8		長谷川氏本	130020063700	聚成-1142
80.7		長谷川氏本	130020064400	聚成-1137
84.2		長谷川氏本	130020061600	聚成-1131
59.4		長谷川氏本	130020060500	
75.2		長谷川氏本	130020064500	聚成-1140
38.7		長谷川氏本(文政11:1828), 大通寺内慈眼院海印用	130020053900	聚成-1089
38.7		長谷川氏本(宝暦4:1754), 原本二尊院	130020281900	聚成-2116
43.1		長谷川氏本(享保11:1726), 原本延暦寺什物	130020064200	
38.9		長谷川氏本	130020053100	聚成-1091
38.8		長谷川氏本(天保7:1836), 大坂天満寺注文, 原本山門横川什物	130020254500	聚成-2114
37.8		長谷川氏本	130020252500	
27.6		長谷川氏本	130020253500	聚成-2101
38.9		長谷川等鶴(等廓)図, 海量院注文	130020252100	
89.9		長谷川等叔図(天保8:1837), 大坂今里妙法寺注文, 依天下茶屋木像	130020051500	聚成-1097

63	地藏菩薩像	紙本白描	1 枚	現光	弘化 4 年	1847	09_02	148.1
64	地藏菩薩像	紙本白描	1 枚	現光	弘化 4 年	1847	09_04	112.8
65	孔子十哲像	紙本白描	1 枚	現光	弘化 4 年	1847	10_02	127.0
66	釈迦十六善神図	紙本白描	1 枚	現光	弘化 4 年	1847	10_16	147.0
67	釈迦十六善神図	紙本白描	1 枚	現光	弘化 4 年	1847	10_18	136.5
68	釈迦十六善神図	紙本白描	1 枚	大願	弘化 4 年	1847	11_03	135.0
69	鳥根法摩明王像	紙本白描	1 枚	現光	弘化 5 年	1848	02_??	112.0
70	善導像	紙本白描	1 枚	大願	弘化 5 年	1848	02_??	115.0
71	某僧像	紙本白描	1 枚	作者不詳	弘化 5 年	1848	02_04	59.6
72	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1 枚	作者不詳	弘化 5 年	1848	02_09	55.2
73	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1 枚	現光	弘化 5 年	1848	02_09	140.0
74	親鸞(見真大師)像	紙本白描	1 枚	大願	弘化 5 年	1848	02_09	60.5
75	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1 枚	現光	弘化 5 年	1848	02_10	112.2
76	一遍上人智真像	紙本白描	1 枚	大願	弘化 5 年	1848	02_10	38.0
77	善導法然対面図	紙本白描	1 枚	大願	弘化 5 年	1848	02_15	75.4
78	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1 枚	大願	弘化 5 年	1848	02_15	56.2
79	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1 枚	大願	弘化 5 年	1848	02_15	112.5
80	浄土真宗七高僧像	紙本白描	1 枚	大願	弘化 5 年	1848	02_15	106.2
81	聖徳太子像	紙本白描	1 枚	作者不詳	嘉永元年	1848	03_16	84.5
82	五大虚空蔵菩薩像	紙本白描	1 枚	大願	嘉永元年	1848	04_23	109.4
83	某僧像	紙本白描	1 枚	大願	嘉永元年	1848	05_03	67.1
84	孔雀明王像	紙本木版墨刷	1 枚	大成	嘉永元年	1848	05_04	183.0
85	智積院僧正像	紙本白描淡彩	1 枚	現光	嘉永元年	1848	05_04	68.0
86	某僧像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永元年	1848	05_15	77.5
87	某僧像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永元年	1848	05_15	54.4
88	達磨像	紙本白描	1 枚	現光	嘉永元年	1848	05_17	63.5
89	梵天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	96.7
90	日天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	96.8
91	伊舎那天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	96.2
92	帝釈天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	97.2
93	火天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	97.2
94	焰摩天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	96.5
95	地天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	97.0
96	月天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	96.7
97	毘沙門天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	97.3
98	風天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	97.2
99	水天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	97.0
100	羅刹天像	紙本白描	1 枚	大願・大成・現光	嘉永元年	1848	06_10	96.5
101	愛染曼荼羅図	紙本白描	1 枚	大成・現光	嘉永元年	1848	06_29	79.5
102	准胝觀音像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永元年	1848	07_23	38.0
103	准胝觀音像	紙本白描一部著彩	1 枚	大成	嘉永元年	1848	09_13	92.8
104	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	01_08	78.3
105	普賢菩薩像	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	01_10	89.5
106	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	01_19	55.7
107	南山大師道宣像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	01_21	92.2
108	嶺山像	紙本白描淡彩	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	01_26	76.0
109	不願像	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 2 年	1849	01_29	67.1
110	月江院某僧像	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	01_30	66.0
111	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 2 年	1849	02_01	85.8
112	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	02_02	67.9
113	某僧像(持竹籠)	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 2 年	1849	02_02	67.4
114	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	02_02	66.3
115	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 2 年	1849	02_02	64.0
116	是照院某僧像	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	02_04	50.0
117	達源像	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 2 年	1849	02_05	101.7
118	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	02_05	68.2
119	光禪像	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	02_05	80.5
120	日潮像	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	02_05	57.4
121	某僧像(持扨子)	紙本白描淡彩	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_05	64.0
122	雪山像	紙本白描	1 枚	現光	嘉永 2 年	1849	02_06	56.2
123	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_06	65.5
124	某僧像(持竹籠)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_06	51.4
125	某僧像(持扨子)	紙本白描一部淡彩	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_06	68.2
126	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_07	67.9
127	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_08	57.5
128	某僧像(持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_08	65.1

98.8		長谷川氏本 (天保 7:1836), 河内願正院注文, 原本東寺什宝	130020255100	聚成 -2100
54.7		長谷川氏本, 原本伝張思恭筆	130020253300	聚成 -2112
72.5		長谷川氏本	130020660300	聚成 -4180
93.0		長谷川氏本	130020051700	聚成 -1096
76.5		長谷川氏本	130020051600	
90.5		長谷川氏本	130020050500	聚成 -1095
53.2		長谷川等鶴圖	130020350100	聚成 -2165
27.5	A印	長谷川氏本	130020846600	
38.5	A印	長谷川等鶴圖	130020850200	聚成 -3281
38.4	A印	長谷川氏本	130020843600	
79.3	A印	長谷川氏本, 原本粟生光明寺什物	130020844700	聚成 -3252
48.5		長谷川氏本	130020847800	聚成 -3260
92.3	A印	長谷川氏本	130020843300	
16.5	A印	長谷川氏本	130020848800	聚成 -3263
160.3	A印	長谷川氏本	130020841000	聚成 -3246
46.1	A印	長谷川氏本	130020844500	
61.8	A印	長谷川氏本	130020844800	
37.9		長谷川氏本	130020848301	聚成 -3262
38.0		長谷川氏本	130020700300	
90.3		長谷川氏本	130020260900	
56.5	A印	長谷川氏本	130020793400	聚成 -3200
125.3		長谷川等鶴 (賀一) 写本 (享和元:1801), 原本智積院方丈	130020320200	版画 -029
44.1	A印	長谷川等叔圖, 智積院智城取次	130020801400	聚成 -3189
61.8	A印	長谷川氏本	130020793000	
46.2	A印	長谷川氏本	130020793100	
34.7	A印	長谷川氏本	130020830500	聚成 -3203
37.8	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420101	聚成 -2239
38.2	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420102	聚成 -2240
37.8	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420103	聚成 -2241
37.8	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420104	聚成 -2242
38.2	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420105	聚成 -2243
37.8	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420106	聚成 -2244
38.2	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420107	聚成 -2245
37.8	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420108	聚成 -2246
37.8	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420109	聚成 -2247
38.1	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420110	聚成 -2248
38.2	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420111	聚成 -2249
38.0	A印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420112	聚成 -2250
63.5		長谷川氏本	130020040700	聚成 -1067
27.7		長谷川氏本	130020200300	
56.5		長谷川等鶴圖 (梅尾山所藏)	130020200400	聚成 -2028
41.3	A印	長谷川等鶴圖	130020851900	
36.2		長谷川理吉郎写本 (天保 4:1833), 天満宝珠院注文	130020110200	聚成 -2074
34.2	A印	長谷川等鶴圖	130020836400	
34.6	A印	長谷川等鶴圖	130020722700	聚成 -3033
42.6	A印	長谷川氏本	130020838700	聚成 -3235
46.1	A印	長谷川氏本	130020832700	聚成 -3230
34.6	A印	長谷川氏本, 大坂難波月江院	130020837500	
56.8	A印	長谷川氏本	130020839700	
44.7	A印	長谷川氏本	130020831600	
42.6	A印	長谷川氏本	130020833100	
44.1	A印	長谷川氏本	130020833600	
38.3	A印	長谷川氏本	130020837200	
34.0	A印	長谷川氏本	130020838200	聚成 -3237
52.8	A印	長谷川氏本	130020834600	聚成 -3226
34.3	A印	長谷川氏本	130020834800	
52.8	A印	長谷川氏本, 信性寺	130020839918	
34.5	A印	長谷川氏本 (元文 3:1738), 身延山方丈	130020850500	聚成 -3283
34.5	A印	長谷川等鶴圖	130020852200	
34.0	A印	長谷川氏本 (宝曆 6:1756), 園部徳蓮寺黙笑	130020832600	聚成 -3219
34.2	A印	長谷川氏本	130020834300	
34.4	A印	長谷川氏本	130020837000	
42.2	A印	長谷川氏本	130020839909	
44.1	A印	長谷川等鶴圖	130020839800	
34.2	A印	長谷川氏本	130020839300	
34.7	A印	長谷川等鶴圖	130020839600	

129	大並山某僧像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_/09	68.0
130	某僧像 (持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_/09	66.0
131	某僧像 (持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_/09	53.1
132	某僧像 (持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_/09	68.4
133	某僧像 (持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_/09	67.7
134	惠雲像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_/12	44.8
135	宝福寺某僧像	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 2 年	1849	02_/12	51.5
136	隱之像	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 2 年	1849	02_/12	67.5
137	某僧像 (持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_/12	68.0
138	某僧像 (持扨子)	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	02_/12	48.6
139	某僧像 (持竹篋)	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 2 年	1849	05_/29	66.0
140	如意輪觀音像	紙本白描淡彩	1 枚	大成	嘉永 2 年	1849	12_/02	55.3
141	十三仏図	紙本木版墨刷	1 枚	長谷川等鶴	嘉永 2 年	1849	12_/07	102.7
142	虚空蔵菩薩不動毘沙門像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 3 年	1850	02_/08	53.9
143	釈迦三尊像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 3 年	1850	02_/20	76.5
144	薬師如来像	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 3 年	1850	04_/25	93.0
145	薬師如来像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 3 年	1850	05_/05	93.0
146	大威徳明王像	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 3 年	1850	10_/27	118.0
147	十三仏図	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	03_/20	99.3
148	釈迦十六善神図	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	07_/21	107.5
149	釈迦十六善神図	紙本墨画	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	07_/21	144.0
150	善名称吉祥王如来像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	07_/29	28.0
151	釈迦十六善神図	紙本墨画	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	08_/21	138.5
152	須弥壇図	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	08_/22	28.2
153	釈迦十六善神図	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	08_/27	99.8
154	十三仏図	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	09_/10	75.1
155	釈迦十六善神図	紙本白描淡彩	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	09_/21	128.5
156	十三仏図	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	10_/23	71.5
157	聖観音像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	10_/24	67.6
158	五髻文殊菩薩像	紙本白描	1 枚	大成	嘉永 4 年	1851	11_/04	133.8
159	大随求菩薩像	紙本白描淡彩	1 枚	大成	嘉永 5 年	1852	02U/09	104.2
160	仏眼仏母像	紙本白描	1 枚	作者不詳	嘉永 6 年	1853	12_/??	147.4
161	熾盛光仏頂曼荼羅図	紙本白描	1 枚	作者不詳	嘉永 7 年	1854	08_/11	77.7
162	千手観音曼荼羅図	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 7 年	1854	08_/15	92.3
163	吉祥天曼荼羅図	紙本白描	1 枚	大願	嘉永 7 年	1854	08_/15	149.2
164	不動曼荼羅図	紙本白描	1帖(4紙)	大願	安政 5 年	1858	10_/20	27.5
165	虚空蔵菩薩像	紙本白描	1 枚	大願	江戸時代後期	19th century		151.5
166	不動明王像	紙本白描	1 枚	作者不詳	江戸時代後期	19th century		48.8
167	辨才天像	紙本白描彩色	1 枚	大成	江戸時代後期	19th century		90.1
168	和合神図	紙本白描	1 枚	大成	江戸時代後期	19th century		82.8
169	弘法大師空海像	紙本白描	1 枚	現光	江戸時代後期	19th century		38.0
170	道雄像	紙本白描	1 枚	大願	江戸時代後期	19th century		56.0
171	七高僧像	紙本白描	1 枚	大願	江戸時代後期	19th century		46.5
172	浄土宗三祖像	紙本白描	1 枚	大願	江戸時代後期	19th century		56.5
173	證空像	紙本白描	1 枚	作者不詳	江戸時代後期	19th century		54.1
174	親鸞 (見真大師) 像	紙本白描	1 枚	大願	江戸時代後期	19th century		55.6
175	蓮如 (慧燈大師) 像	紙本白描	1 枚	大願	江戸時代後期	19th century		41.5
176	某僧像 (合掌)	紙本白描	1 枚	大成	江戸時代後期	19th century		49.1
177	某僧像 (定印)	紙本白描	1 枚	大願	江戸時代後期	19th century		57.1
178	羅漢図	紙本墨画	1 枚	現光	江戸時代後期	19th century		102.2
179	千利休像	紙本白描	1 枚	大願	江戸時代後期	19th century		70.2
180	長谷川等観像	紙本白描淡彩	1 枚	作者不詳	江戸時代後期	19th century		76.8
181	龍図	紙本着彩	1 枚	大成	江戸時代後期	19th century		57.5
182	獅子図	紙本白描	1 枚	大成	江戸時代後期	19th century		27.8

*1 京都市立芸術大学芸術資料館の収蔵番号

*2 法蔵館『仏教図像集成』の図版番号

45.3	A印	長谷川氏本	130020818000	聚成 -3092
40.6	A印	長谷川氏本	130020831500	
34.6	A印	長谷川等鶴図	130020834500	
43.5	A印	長谷川氏本	130020835200	
53.4	A印	長谷川氏本	130020851800	
34.4	A印	長谷川氏本 (延享元 :1744), 肥前玉毫寺忠雲	130020834400	聚成 -3234
34.2	A印	長谷川氏本 (宝暦 6:1756), 伏見宝福寺	130020836300	聚成 -3220
44.0	A印	長谷川氏本 (元文 4 : 1739), 下総東昌寺	130020838300	
43.9	A印	長谷川氏本	130020839500	
34.3	A印	長谷川等鶴図	130020852100	
49.0	A印	長谷川氏本	130020836000	
38.3		長谷川より校合依頼	130020180600	
41.6		版下長谷川等鶴画, 版元中村善哉より天王寺屋へ	130020293800	
30.6		依長谷川等鶴図, 智積院智忠注文, 鍵屋又平取次, 安房清澄寺	130020260300	
45.7		長谷川等鶴図, 最上良典注文	130020052900	聚成 -1086
62.7		長谷川等鶴写本	130020070600	
60.0		長谷川等鶴写本	130020070500	聚成 -1154
78.4		長谷川氏本	130020330600	聚成 -2164
42.5		依長谷川等鶴図校合	130020291400	
128.5		長谷川氏本	130020051300	
77.8		長谷川等鶴図	130020051400	
20.6		依長谷川等鶴図	130020071100	
65.0		長谷川等鶴図	130020051200	
48.7		長谷川氏本	130020985000	聚成 -4136
104.5		長谷川氏本	130020050600	
44.3		依長谷川等鶴図校合, 越後浄鱗法院注文	130020291500	
63.5		長谷川氏本	130020050400	聚成 -1093
38.0		依長谷川等鶴図校合, 那珂湊華蔵院南部屋宗太夫伴注文, 徳田村遍照院観海取次	130020290600	聚成 -1190
36.2		依長谷川等鶴図校合, 那珂湊華蔵院南部屋宗太夫伴注文, 徳田村遍照院観海取次	130020140800	
74.7		依長谷川等鶴図, 土佐普門寺妙行注文	130020122000	
52.5		依長谷川等鶴図校写, 長浜神照寺常嘉院注文	130020280700	聚成 -2119
102.7		長谷川等叔写本	130020100100	
56.0		長谷川氏本	130020023100	聚成 -1034
79.6		長谷川等鶴写本	130020040100	聚成 -1055
65.9		長谷川氏本 (古写校本)	130020041500	聚成 -1074
38.3	A印	長谷川氏本	130020042300	
132.5		長谷川等鶴図	130020262000	
26.6		長谷川等鶴図	130020302300	聚成 -2132
38.3		長谷川等叔図 (天保 8:1837), 原本洛西東寺什物	130020380500	
27.2		長谷川氏本	130020610600	聚成 -4104
27.5		長谷川より注文, 依長谷川等鶴図 (面貌部)	130020751500	
43.7	A印	長谷川氏本, 原本摂州生玉地藏院什物	130020764700	聚成 -3145
27.7	A印	長谷川氏本	130020845900	
51.2	A印	長谷川氏本	130020846300	聚成 -3254
38.5	A印	長谷川元東写本 (原粉本宇津宮綱之写本, 原本京都市三鈷寺所什物)	130020846800	聚成 -3258
51.6		長谷川氏本	130020847600	
37.0		長谷川氏本	130020848700	聚成 -3264
34.1	A印	長谷川氏本	130020850800	
38.0	A印	長谷川氏本	130020851700	
57.4		長谷川等舟写本	130020861100	聚成 -3286
39.0	B印	長谷川等鶴画自賛	130020870600	聚成 -4194
103.8		長谷川等鶴 (等観等廓) 画自賛	130020872800	聚成 -4198
27.5		長谷川氏本 (推定)	130020931200	聚成 -4141
45.5		長谷川氏本 (推定)	130020932100	聚成 -4147

A印：(重郭朱文朱方印) 王城中眞六角堂／頂法寺内能満院]

B印：(白文朱方印) 無言蔵／圖書記]

C印：(朱文朱円印) 無言蔵]

D印：(朱文朱円印) 无言蔵]

表2 仲家本過去帳忌日一覧

通番	年号	月	日	宿坊	法名など	注記	続柄
1	文祿2	1593	06 15	本	道淳	長谷川久藏信春」行年廿六]	長谷川等伯男
2	慶長9	1604	11 11	本	妙清	長谷川等伯妻]	長谷川等伯妻
3	慶長15	1610	02 24	本	嚴淨院等伯日妙大居士	能州本七尾畠山之家臣文之丞宗道男」自雪舟五代長谷川法眼]	奥村宗道男 (長谷川等伯)
4	慶長16	1611	09 02	本	宗伯	長谷川]	(不明)
5	慶長17	1611	10 13	本	等後	長谷川法橋]	長谷川等伯男
6	慶長18	1613	08 04	本	等秀	長谷川等憶父]	長谷川等伯女の夫
7	元和9	1623	06 21	本	等岳日善	長谷川]	長谷川等憶の義父
8	寛永9	1632	08 16	本	妙入	長谷川綱加兵衛母上牧]	
9	慶安元	1648	06 27	本	妙圓	長谷川等秀妻」等憶母]	長谷川等伯女
10	承応2	1653	07 04	信	涼屋清心女	繪屋庄兵衛]	繪屋庄兵衛妻?
11	承応2	1653	08 21	信	融月宗圓信士	長谷川与左エ門父]	長谷川与左エ門父
12	明暦2	1656	06 19	本	高岳院妙善日修	長谷川等憶妻]	長谷川等憶妻
13	万治2	1659	06 11	本	妙敬	長谷川等憶息女]	長谷川等憶女
14	寛文元	1661	10 04	信	花月宗榮士	繪屋清兵衛息]	繪屋清兵衛息
15	寛文7	1667	08 06	信	西譽生順信士	六代法橋 長谷川宗也]	長谷川等伯男 (長谷川宗也)
16	寛文8	1668	01 24	信	涼春信士	繪屋吉兵衛息]	繪屋吉兵衛男
17	寛文9	1669	07 06	信	夢幻童子	繪屋清兵衛孫]	繪屋清兵衛孫
18	寛文10	1670	05 23	信	永春信女	繪屋清兵衛娘]	繪屋清兵衛女
19	寛文10	1670	07 25	信	秋光童子	繪屋吉右エ門息]	繪屋吉右エ門男
20	寛文12	1672	05 05	信	玄齋信士	繪屋清兵衛]	繪屋清兵衛
21	寛文13	1673	? 06	[信]	□□□□[信女]	[繪屋]宇右画門妹]	長谷川宗也女
22	寛文?	?	? 03	信	霜葉暁月	繪屋宇右画門娘]	長谷川宗雪女
23	延宝4	1676	11 08	信	先雪童女	繪屋権左画門娘]	繪屋権左エ門女
24	天和2	1682	08 14	本	等憶日等	長谷川 江戸圓行院]	長谷川等伯女の男 (等秀男)
25	天和3	1683	08 11	信	涼月妙栄童子	繪屋権左エ門娘]	繪屋権左エ門娘の男?
26	貞享3 *1	1686	02 10	信	春去童子	繪屋市良右エ門]	繪屋市良右エ門男
27	貞享4	1687	07 27	信	順譽商雲尼	宗也妻]	長谷川宗也妻
28	元禄3	1690	05 29	信	厭暑涼信女		(不明)
29	元禄5	1692	05 18	信	浄安宗淳信士	七代 宇右エ門法橋等作」信清]	長谷川宗也二男 (長谷川宗雪)
30	元禄8	1695	08 28	信	直譽到有宗斬	繪屋権左エ門父]	繪屋権左エ門父
31	元禄12	1699	03 27	信	妙春信女	繪屋吉兵衛母]	繪屋吉兵衛母
32	元禄13 *2	1700	05 08	信	幻夏襖子	右同人 (繪屋権左画門) 孫]	繪屋権左エ門孫
33	元禄15	1702	10 08	信	董山周芳信女	宇右エ門母]	長谷川宗雪妻?
34	宝永7	1710	03 21	信	圓生孤覺童子	宇右エ門子]	長谷川宗清男
35	宝永7	1710	04 16	信	知依利厭童子	繪屋宇右エ門子]	長谷川宗清男
36	享保3	1718	09 16	信	桂譽智芳信女	長谷川宇右エ門妻]	長谷川宗雪妻?
37	享保6	1721	11 26	天	智専童女	靴屋八兵衛子]	靴屋八兵衛女
38	享保20	1735	10 21	信	浄岸惠照信女	繪屋宇右エ門娘]	長谷川宗清男娘
39	元文2 *3	1737	11 06	[信]	[畫誉宗寂信士]	[全部欠 恐らく宗清等霖の記事]	長谷川宗雪男 (長谷川宗清)
40	元文4	1739	09 02	信	釋妙知	井筒屋傳兵衛妻]	(不明)
41	元文6	1741	11 28	天	觸光淨照信士	靴屋八兵衛]	靴屋八兵衛
42	寛保2 *4	1742	? 06		青地香霖	九代 等霖宗清門人」等調後見]	長谷川宗清弟子 (青地香霖)
43	延享元	1744	07 13	天	普光惠照信女	靴屋八兵衛妻]	靴屋八兵衛妻
44	延享3	1746	05 13	信	釋妙照		(不明)
45	宝暦4	1754	09 15	信	松譽貞心信女	宗清宇右エ門妻」長谷川 (前) 賀一良母]	長谷川宗清妻
46	宝暦6	1758	08 18		釋妙春信女	智親母」若州/新道村]	長谷川等調妻 (先) 母
47	宝暦11	1761	09 16	光	如寂大空禪定門	中川周保」宿坊誓願寺中/光明寺江納]	中川周保
48	宝暦12	1762	02 02	信	順霞童子	長谷川 (前) 賀一郎子」等調前名也]	長谷川等調男
49	宝暦12	1762	04 20	信	釋道智	西七条於りん」長谷川ヨリ出ル酒屋順一妻]	(不明)
50	宝暦12	1762	11 22	信	理芳智親信女	長谷川賀一良妻俗名おりく」等鶴賀一實母]	長谷川等調妻 (先)
51	宝暦13	1763	02 03	天	露滴童子		(不明)
52	明和元	1764	11 20		釋祐顯	若州/新道村長右画門」智親父]	長谷川等調妻 (先) 父
53	明和5	1768	10 14	天	惺夢童子	賀一弟]	長谷川等調男
54	明和5	1768	10 17	天	了惺童子	賀一弟]	長谷川等調男
55	明和8	1771	06 23		榮久妙壽信尼	淀屋妙壽/松譽貞心之妹也」北野御前道墓所西一番南ヨリ二軒目]	長谷川宗清妻の妹
56	明和8	1771	09 24	天	涼艶童女	賀一妹]	長谷川等調女
57	天明元	1781	12 03	天	松室貞了信女	等調妻俗名おなつ」(後) 賀一後母]	長谷川等調妻 (後)
58	寛政4	1792	02 03		哲翁良賢禪定門	西七条酒屋甚七」等調姉おりん聲]	長谷川宗清女の夫
59	寛政10	1798	08 18	天	浄心秋月禪定門	十代 賀一父」号前賀一也」俗名長谷川等調]	長谷川宗清男 (長谷川等調)
60	寛政11	1799	05 09		婦一鐵外仙牛信士	丹川園部畑宅之丞/後賀一妻父]	長谷川等鶴妻の実父

通番	年号	月	日	宿坊	法名など	注記	続柄
61	寛政 12	1800	07	15		西應淨念信士 西陳卒」廟處有北山今宮之鳥居前ヨリ八町北長善寺境内長谷川後賀一第」	長谷川等潤男
62	寛政 12	1800	10	18		觀月智本信女 丹州園部」長谷川後賀一妻之母」	長谷川等鶴妻の母
63	享和 3	1803	07	22		釋尼妙光 貞了母」行年九十一死ス」	長谷川等潤妻(後)母
64	享和 3	1803	09	12		阿耆梨密應 廟所有洛西孤塚」	(不明)
65	文化元	1804	06	02	天	心寂權因信士 行年廿□」等鶴賀一第」	長谷川等潤男
66	文化元	1804	10	05		逸空精俊法尼 西七条酒屋甚七妻」等潤ノ姉」八十一才死去」信行寺ニ分骨ヲ納メル(朱筆)」	長谷川宗清女
67	文化 7	1810	12	12	天	寶岳淨林禪定門 号 前賀一」十一世」俗名長谷川等鶴」	長谷川等潤男(長谷川等鶴)
68	文化 10	1813	12	22		釋妙淨 等鶴娘」加州公能師春藤万右衛門妻」	長谷川等鶴女
69	文政 13	1830	07	12		涼照童女 十二代等叔實子等舟妹」	長谷川等叔女
70	天保 6	1835	07	22		淨妙貞月信尼 等鶴妻」	長谷川等鶴妻
71	天保 8	1837	09	03		釋專教 等叔父」俗名 江畑宗次郎」越中東岩瀬」	長谷川等叔実父
72	天保 12	1841	10	10		等叔齋惠覺信士 十二世」	江畑宗次郎男(長谷川等叔)
73	天保 14	1843	08	12		蓮室清容信女 大坂」等鶴二娘」	長谷川等鶴女
74	天保元 or13 *5	?	12	08		徳性童女 等舟姉娘」	長谷川等叔女の女
75	天保	?	?	02		釋聲空 京師住」加州 春藤万右衛門」	長谷川等鶴女の夫
76	嘉永 6	1853	07	22		忍光童女 式才」等舟娘」	長谷川等舟女
77	安政 2	1855	02	04		妙利信女 名□□/等舟□□」	長谷川等舟女
78	安政 2	1855	04	17		泰巖院殿尊泉寂室尊靈 武者小路正二位前権大納言藤原朝臣公隆卿」	(不明)
79	安政 2	1855	07	08		幻泡童子 式才」等舟二子俗名増二郎」	長谷川等舟男
80	安政 2	1855	11	05		露消孩兒 女」等舟子」	長谷川等舟女
81	安政 3	1856	04	22		大阿闍梨榮順大和尚 泉州中深井野々宮香林寺」	(不明)
82	安政 4	1857	12	07		永昌院天然泰道居士 二男 古山静齋」医師 古山齋宮男子」大阪今橋式丁目真嶋隆舟へ入家弟」	(不明)
83	安政 6	1859	07	06		蓮生院殿靜心妙照大姉 武公隆卿乃姫母妙鈴院」	(不明)
84	安政 7	1860	02	04		了幻童子 式才」等舟三男子加三郎」	長谷川等舟男
85	文久 4	1864	06	03		涼玉童女 二才」等舟末之娘」	長谷川等舟女
86	明治 4	1871	07	28	天	秋覺長榮信士 母 十三代目/行年五十四歳」長谷川賀一郎等舟 /高野山/病死」	長谷川等叔男(長谷川等舟)
	明治 4 *6	1871	07	29	天	秋覺長榮信士 長谷川賀一郎五十四才而以病死且画工高野山僧侶仍請住山敷載中小田原二而亡死體同山奥院ニ埋等白出世十三代目」	長谷川等叔男(長谷川等舟)
87	明治 4	1871	08	28	天	宝山明榮信士 長谷川賀一郎伴/高野山二而以病死」長谷川十四世/号等榮」	長谷川等舟男
88	明治 5	1872	08	05		釋了誓 等舟妻比佐父」西本願寺派」建仁寺上條上妙住寺」	長谷川等舟妻の实父
89	明治 5	1872	08	05		釋良清	(不明)
90	明治 6	1873		26	天	智幽孩兒 生長谷川■■■■/天性寺■■■■/女子■■■■	(不明)
91	明治 8	1875	06	27		長谷川関子 長谷川等舟姉六十才死」陸前国宮城縣下仙臺川内亀ヶ岡堀省治宅ニ於命終」伊達家墓所經姫君同所/祥麟山下云也」	長谷川等叔女
92	明治 9	1876	03	10		釋貞敏 村上碩水娘」実父長谷川賀一郎等舟ノ娘」東大谷葬」	長谷川等舟女(村上碩水養女)
93	明治 16	1883	11	13		法覺唱空善女 長谷川賀一郎等舟妻」俗名 ヒサ」五十七年」	長谷川等舟妻
94	明治 18	1885	11	13		瑞巖碩水信士 長谷川等舟姉こう夫/俗名 碩水」八十一年」	長谷川等叔女の夫(村上碩水)
95	明治 26	1893	07	25		良譽春月禪定尼 村上賀市良」母事」	長谷川等叔女?
96	?	?	07	15	本	等林 長谷川能州七尾本延寺禮那」	(不明)
97	?	?	?	14	本	長悅 長谷川」	(不明)
98	?	?	?	25	信	一翁淨圓 繪屋庄兵衛父」	繪屋庄兵衛父
99	?	?	?	20	天	信月恵明禪尼 賀一郎實母也」八十二而死ス」	長谷川等叔妻
100	?	?	02	06		順霞童子	(不明)
101	?	?	08	06		俗名おつね	(不明)
102	?	?	08	06		俗名常吉	(不明)
103	?	?	11	02	(信)	□□連 長谷川□□□□子」	(不明)

*1 寅を丑としているのであるいは貞享2年か

*2 寅を卯としているのであるいは元禄12年か

*3 この部分全て欠失。忌日より長谷川宗清の記事があるべき部分なので仲家本系譜により補う。

*4 没年欠失。仲家本系譜により補う。

*5 「天保 寅」と記される。天保元年の可能性があるが、併記しておく。

*6 仲家本系譜では28日を忌日とするが、過去帳では28日と29日の両日に記事がある。

精俊尼のところに宗雪の子宗清による写しが残されていたため、これを宗清孫の等鶴が清書した。これが現在残された系譜であるとしている⁽¹⁵⁾。等鶴の父等潤について本系譜の記述は詳細であり、この系譜が等潤の亡くなった寛政10年(1798)以後に清書されたことが理解されるとともに、精俊尼が存命中であることがわかるため、その没年である文化元年までに着手されたことがわかる。精俊尼は仲家本過去帳によれば、長谷川宗清の娘で等潤の姉にあたるおりんであり、西七条の酒屋甚七の妻となっている(表2-66)。天明8年の大火の類焼地をみれば、西七条には至っておらず、焼失を免れたものと考えられる。

従ってこの系譜の成立は旧記本系譜に先行しているものと考えなければならない。宗雪は等伯の三男と思われる宗也の子であるから、旧記本系譜同様京都の長谷川家の系譜であることがわかる。等鶴によって清書された系譜は、以後累代に書き継がれ明治期の等宗に至っている。

この系譜では、「自雪舟五代等伯」の伝承が明記され、累代を定めて家伝としたことがわかるが、さきの旧記本系譜同様、等伯が狩野祐雪の弟子となり、その没後山口の雲谷等益の弟子となったとする今日では受容しがたい伝記に従っている。本系譜では、等伯を雪舟五代とするために、〈雪舟-雪溪-雲谷等顔-雲谷等益-等伯〉と画系をつないでいる。等益を雪舟より四代とするため、その弟子である等伯が五代となる理屈であるが、現在もお晩年の等伯が雪舟五代を名乗る理由は不明のままである。それはとりもおさず、末裔達が画系を整備する必然性の欠如につながっている。宮島新一氏が等伯の評伝を示す中で、等伯自身の雪舟に対する関心の低さを指摘するように⁽¹⁶⁾、長谷川家における雪舟の位置づけには恣意的な要素があり、不明な点が多い。

この系譜を所有する仲家は、長谷川等舟の弟子仲又七に始まる画系である。等舟の次男等宗亡き後、又七の子仲市太郎が等宗の長女を娶り、長谷川家の画系を継承した。その子仲春洋がこれを受け継ぎ現在に至っている。京都の長谷川家の血脈を今に伝える家である証しとして、仲家は近世の長谷川家が所有した膨大な粉本を継承しており、桃山期に生まれた画系が今に続く貴重な存在となっている。仲家に伝わる系譜を以下仲家本系譜と呼ぶことにする。

最後にあげるのは、中村溪男氏により紹介された江戸の長谷川家の系譜である⁽¹⁷⁾。序が付されており、原本が大正12年(1923)9月の関東大震災で焼失したため、長谷川幸吉が、庶流の山崎喜作が所持する写しから昭和2年(1927)9月に作成したものと記している⁽¹⁸⁾。原本の成立時期が不明である点と、列挙される人名の関係が不明瞭である点が、転写本の限界として惜しまれるが、旧記本、仲家本と大きく異なり、江戸に移った等伯孫の末裔による系譜である点が貴重である。

ただ残念なことに本系譜は血脈だけではなく、弟子筋までも記しているため、極めて混乱している。雪舟に始まる点は仲家本系譜と同じだが、長谷川家本系譜では『画説』に見る系図と類似性を見せる〈雪舟-等春-法淳-道浄-等伯〉の継承を記している。旧記本系譜、仲家本系譜では、等伯が雲谷等益に師事する点を伝えているが、同じ長谷川家でありながら、師系の伝承が異なる点が興味深い。等春を長谷川家の画系の直接の祖としている点は『画説』における等春重視の傾向と結びついている。等伯以後は先妻妙浄の子である久蔵と宗宅(等後)

が記され、宗也には触れていない。主要な部分は等伯の娘を娶った弟子等秀及びその子等憶を養子とした等岳以下の系譜であり、幕末明治期の等英雪堤（1829 - 1884）の代まで続いている。

3. 長谷川家系譜の資料性

仲家本過去帳には、京都の長谷川家が、本法寺からはじまり信行寺から天性寺⁽¹⁹⁾へと檀那寺を移す様子が記される。これは本法寺教行院の過去帳のみでは知ることのできない情報である。系譜や過去帳の持つ資料性は非常に興味深い、これまでこれらの資料は桃山期の長谷川等伯研究に偏向して使用されることが多かったため、多様な内容の一部が利用されるに過ぎなかった。本来江戸時代の記録を桃山時代の研究に利用するため、時間の隔たりから生じる錯誤などが単純に批判の対象とされることもあり、史料としてはさほど重視されてこなかったのである。しかし、資料の成立状況から見れば、近世長谷川家の動向を理解するために、極めて示唆に富む内容を持つ。これまであまり意識されていないが、これらが有する近世資料としての価値を二つの事例の中に検証し、絵仏師長谷川家を考察するための基本資料と位置づけたい。近世長谷川家の系譜資料が持つ内容の柱のひとつが、憲海とも関わりのある絵仏師長谷川家に関する記録である。

現在の通説では、等伯には五人の子がいたと考えられている。26歳で亡くなった長男久蔵と弟宗宅が先妻妙浄の子と思われ、後妻の妙清の子と考えられているのが宗也と長女妙円である。この四名は三種の長谷川家系譜の記述から考えても等伯の実子と見て問題ない。ただ等重とも称したとされる左近については疑問が残る。

すでに左近に関する諸論考で指摘されるとおり、現存する三種の長谷川家系譜は、左近の存在を記していない。さらに仲家本過去帳においても、等伯の直接の子孫について久蔵、宗宅（等後）、宗也、妙円、等岳、等秀、等憶について記録があり、夭折した久蔵にはじまり等憶に至るまでの本法寺を檀那寺とする縁者については、基本的に記載する方針を見せていながら、左近に充当可能な人物が見いだせないのである。とすれば、はたして本当に左近が等伯と縁戚関係があったのかという疑問が生まれるのは当然だろう。左近が等伯の子であることを客観的に示す資料は見当たらない。

もちろん、左近は比較的作品が残されており、その表現について一定の共通認識が成立しているから、長谷川派の實在の人物とするに疑問はない。『皇朝名画拾彙』に考察するようにこれを宗達派に関係づけることは困難であろう。ただ翻って彼が等伯の子であるとする説について見れば、二つの状況分析から推測されているばかりで、説得力に限界がある。

まず一つは、画伝類の記事から判断していることで、『丹青若木集』『辨玉集』といった左近の活動期間からさほど隔たらない時代の画伝に等伯とのつながりを示す記事があるが、これはその直前に雲谷等顔と等伯を結んでいることからわかるように、師承関係を表すにすぎず、必ずしも血縁関係を意味するものではない。『本朝画史』には宗也の名は見えても、左近の名はない。『扶桑名公画譜』によろやく長谷川等重を左近とし等伯の子と記すが、左近在世から

控えめに考えても半世紀以上後の記事であり、その信頼性は低くならざるを得ない。このように、画伝類の左近の記事は、過去帳や系譜が示す事実を補うには説得力を欠いている。むしろ、左近を等伯の子とする説は、もうひとつの理由である「自雪舟六代藤原長谷川左近」の落款⁽²⁰⁾の存在に大きく影響されたものと考えらるべきであろう。

もともと「自雪舟五代」という等伯の款記については、その根拠が不明であり、先に述べたとおり長谷川家においても系譜の中で根拠を模索している状況である。そして彼らに共通する認識は、累代を数えるのに血縁や家督の移譲を根拠とせず、学画における師承関係に依拠していることである。左近が等伯の例にならって「自雪舟六代」を称するためには、等伯への師事のみで要件は満たされていると考えてよい。その意味では、「自雪舟五代」が等伯に限らず幾人もいて矛盾はなく、同様に「自雪舟六代」もまた複数いて不思議はない。等伯がひとつの宣伝効果を期待して「自雪舟五代」を称したとするならば、左近もまた等伯のひそみにならい、これを使用したとして不思議はない。ただ、年長の宗也在世中でもあり、左近と宗也の間に確執が生まれた可能性はある。とはいえ、もし宗也と左近が兄弟であると仮定したとしても、それが檀那寺から排除されるほどの理由といえるのか疑問である。

従って左近がその落款において藤原の氏を記す点を血脈の根拠としてあげる説⁽²¹⁾についても、長谷川家が藤原の氏を使用している以上、長谷川を称する左近が形式的にこれを使用する可能性があるため、大きな意味を与えることは難しいと考える。左近については、従來說を改め等伯の弟子である可能性も視野に入れるべきであろう。よしんば、従來說に従いこれを等伯の子とするならば、過去帳及び系譜に記されない理由が説明されなければならない。等伯没後の長谷川家がむしろ弟子たちの活動によって活況を呈していたことを考慮すべきである。

仲家本過去帳を見たとき疑問となるのは左近の不在にとどまらない。宗伯（表2-4）という人物の存在も不明なのである。宗伯については山根有三氏が考察を加えており、長谷川家本系譜の記述「宗伯 女子 等憶妻」を解釈して、宗伯を等伯の娘とし、等憶（表2-24）は等学の誤記と考えて等学の妻となったと考えた。つまり新たに等伯の一子を想定したのである。しかし、この長谷川家本系譜の記述は宗伯の娘が等憶の妻となったという意味と解釈すべきであろう。もしこれが等伯娘を表す意図があるならば「女子 宗伯 等憶妻」と記すのがこの系譜の記述形式に合致しているし、宗伯という名がこの系譜の中で繰り返し使用される名であるとともに男子にしか用いられていない事実に対する矛盾が解決されるからである。

もちろん宗伯の娘が等憶の妻となったという記述に対しては、誤記の可能性を考えるべきであろう。はじめにこれが誤記ではなく、記述のとおり等憶の妻となったと考えてみよう。すると等秀と妙円の子すなわち等伯の孫である等憶の妻となった妙善（表2-12）の前か後に妻となったことになる。この妙善は等伯の弟子等岳の娘だからである。しかし、宗伯娘が後妻となった場合慶長16年（1611）に宗伯が本法寺教行院に葬られる理由が説明できない。本来長谷川家の人間ではない宗伯は義父として記されなければならないからである。従って可能性があるのは妙善が後妻となる場合のみとなる。この場合宗伯の没年以前に宗伯の娘は等憶に入嫁し

ていなければならないことになり、等憶が90歳程の長命であり、極めて早婚であったという仮定が必要となる。

仲家本過去帳に宗伯の名が記されているということは、長谷川家に嫁いだ娘の名が記されていると考える必要がある。検討の対象となるのは、妙入（表2-8）と書かれた人物である。寛永9年（1632）8月16日に亡くなっており、これも従来の長谷川家系図では触れられないことのない人物であるが、宗伯との関係者を探す時、この妙入をその娘と考えるのが合理的な解釈である。もしこれが等憶の先妻にあたるのであれば、妙善との婚姻はこれ以後に設定されなければならないのだが、妙善の父等岳は、それより早く元和9年（1623）に亡くなっており、長谷川家との縁戚関係がないまま本法寺に葬られている矛盾が生じている。宗伯娘が等憶の妻となったと考えるかぎり、極めて特殊な状況や矛盾を説明する必要が生じるのである。

では次に、宗伯娘の嫁ぎ先が等憶ではなく、等後の誤記であったと考えてみよう。長谷川家本系譜では等憶は等憶と記されており、字形から憶と後の誤読誤記は想定しやすい。長谷川家本系譜における等後（宗宅）の直後である記述位置についても合理性が理解されるし、このように解釈することで妙入を宗宅の妻であると解釈することが可能となる。宗宅の年齢から考えてその妻の存在は当然考慮されるべきであるから、長谷川家の親族の欠けた部分がこれでつながることになる。従って妙入が仲家本過去帳において「長谷川絹加兵衛」の母として記されることにも違和感がない。本過去帳では当主の妻を嫡男の母として記述する例が複数見られ、逸伝の絹加兵衛も宗宅の嫡男となるためである。しかし、絹加兵衛が過去帳に見えないところから、長谷川家を離れざるを得ない理由が生じたことは考慮しなければならない。あるいは、長谷川家本系譜の長吉（14歳で夭折）、仲家本過去帳に見る長悦（表2-976）がこの人物に当たる可能性があるが推測の域を出ない。宗宅の末裔については系譜、過去帳ともに確たる記録がないため、こうした推定から生じる矛盾は見当たらない。

基本的に弟子の名は過去帳に記述されない。等秀の名が見えるのは等伯娘である妙円との婚姻によるものであり、等岳が記されるのは等伯孫の義父となることで、縁戚関係が生じたためである。宗伯の名も娘の婚姻により宗宅の義父となったことから記述されたと見るのが合理的である。宗宅在世中に宗伯が亡くなっているため、宗宅が配慮したと考えることができる。

ただ、この宗伯が等伯の弟子であったかは不明である。仲家本過去帳において宗伯は、「宗伯 長谷川」とのみ記載される。本過去帳において、名のあとに記載されるのは基本的に直接関係する人物との続柄であり、宗伯同様「長谷川」の苗字のみ記載される例は限られている。それは、本法寺を墓所とする等後（宗宅）（表2-5）、等憶（表2-24）、等岳（表2-7）、等林（表2-96）、長悦の五名であり、長悦については逸伝であるが、宗也系以外の長谷川家関係者に対し使用している点が共通する。旧過去帳の焼失後、謄写の際に本法寺教行院過去帳の形式になったものと考えられ、ここに用いられる長谷川の名はその人物が長谷川家の縁者であることを示す注記にすぎない可能性がある。宗伯が長谷川を称したかは定かではない。

宗伯の名で知られている長谷川派の画家としては、等憶の養子となった長谷川宗伯信近（1637-1687）がいる⁽²²⁾。等憶が養子縁組をしたのか、等憶の娘妙敬（表2-13）の婿養子

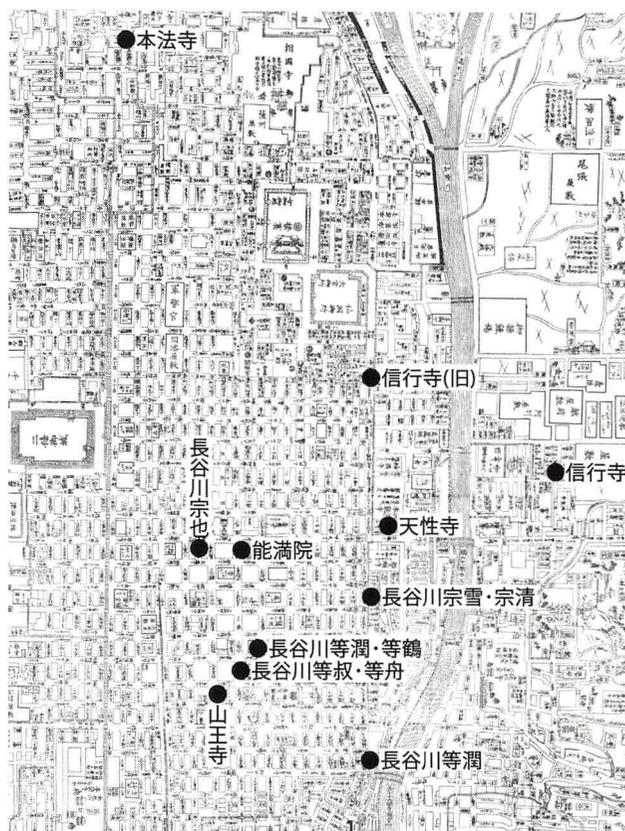
宗也 天正 18 年 (1590) - 寛文 7 年 (1667) (表 2 - 15)

等伯の三男。仲家本系譜では六代とする。等祝または等悦の名も伝えられる。仲家本には宗宅とも呼んだとするが、これは兄の名であり誤伝であろう。字は信正。新之丞と称した。父等伯とともに三條衣棚に住み、等伯没後はそのまま同所で絵屋を継承したと考えられている (図 1)。等伯の後妻妙清の子として生まれたと考えられるが、『本朝画史』には庶子という伝もある。慶安年間 (1648-52) に日蓮宗から浄土宗に改宗したとされる。仲家本過去帳において浄土宗の信行寺を墓所とする最も早い例が承応 2 年 (1653) の絵屋庄兵衛妻と覚しき人物 (表 2 - 11) であることから、信ずるに足る記事である。

仲家本過去帳を見る限り宗也の時代から絵屋⁽²⁴⁾を称する名が頻出する。承応 2 年 (1653) から享保 20 年 (1735) の間は、本法寺を檀那寺とする等秀・等憶の系統をのぞくと、記名はほとんどが絵屋を称する人物に関わるものとなっている。絵屋は家業を現す屋号と見られるが、これがそのまま長谷川家の屋号となっているのかは不明である。この間、過去帳において長谷川と記されているのは、先に述べた本法寺を檀那寺とする者以外では、宗也と宇右衛門の妻 (表 2 - 36) のみである。この宇右衛門は宗雪 (等作) の名であるが、過去帳の中では絵屋宇右衛門と記す例 (表 2 - 22・35・38) が見られるので、実際長谷川家の者が絵屋と称することがあったのは確認できる。

絵屋として庄兵衛、清兵衛、吉兵衛、一郎右衛門、吉右衛門、権左右衛門の名が見えるが、この中で本人の忌日が記されているのは寛文 12 年 (1672) に亡くなった清兵衛のみである (表 2 - 20)。従って絵屋の人々については情報の欠落が多く、過去帳への記載には何等かの事情を想定せざるを得ないが、それを物語る資料は確認できない。ただ、過去帳には原則的に弟子は記載されないため、絵屋と長谷川家の間には何らかの縁戚関係があったと考えなければならない。あるいは宗也の妻がこの絵屋出身の娘であったかもしれない。

もともと絵屋としての活動を行っていた長谷川家にとっても、同業者との結びつきは益するところがあったと思われる。檀那寺を本法寺から信行寺に改めた背景に、この絵屋との関わり



『改正 京町御絵図細見大成』(慶応4年)、『新修京都叢書』による

図 1 憲海及び長谷川家関係地図

が深く影響したことは想像に難くない。寛文7年(1667)8月6日死去。行年78歳。寺町丸太町にあった浄土宗信行寺に葬られた。『本朝画史』には等悦と長谷川宗也の記事がある⁽²⁵⁾。貞享4年(1687)7月27日に亡くなった妻があり、同じく信行寺に葬られた(表2-27)。子が三人いたことが確認され、長男は等誉といい26才で出家し、堺にある浄土宗の安養寺(廃寺)に入ったという。等誉の名は『本朝画史』に見え、絵を描いたことが分かるが、長谷川派として認識されていない⁽²⁶⁾。等伯の弟子に等誉という者がいたため記事に混乱があるかもしれない。長男の出家により、二男宗雪が家督を継いだ。また、仲家本過去帳に「宇右画門妹」とあるのは宗雪の妹の意味と考えられるので宗也の娘であろう(表2-21)。

宗也は絵屋として比較的活発に活動していたことが知られ、作例として祇園八坂神社《大黒布袋角力図絵馬》、相国寺《竜虎図屏風》、清水寺《虎図絵馬》、《柳橋水車図屏風》、《葛に昆虫図屏風》などがあげられており⁽²⁷⁾ 比較的作例の遺る絵師である。その作風は穏健にして装飾的であり、全体として世俗画を対象とする絵屋としての性格を強く表している。

宗雪 元和8年(1622) - 元禄5年(1692) (表2-29)

宗也の次男。等作ともいう。仲家本系譜では七代とする。字は信清。旧記本系譜に宇右衛門と称したとある。京極錦小路上に居住した(図1)。仲家本過去帳には法橋と書かれているが、これを裏付ける資料はない。元禄5年(1692)5月18日死去。行年71歳。法名は浄安宗淳居士。信行寺に葬られた。妻は元禄15年(1702)10月8日に亡くなった「宇右エ門母」(表2-33)、あるいは享保3年(1718)9月16日に亡くなった「長谷川宇右エ門妻」(表2-36)であろう。どちらかに誤記脱字があるようである。嫡男宗清の他、幼くして亡くなった娘(表2-22)がいたらしい。ちなみに長谷川家出身のおりんという女性が酒屋順一の妻となったことが仲家本過去帳に記されており(表2-49)、宗清の娘と同名なので、あるいは宗雪の娘であるかもしれない。

宗也以後の長谷川家の展開を考えれば、仲家本過去帳を見てもわかるとおり、等伯の子宗也はその周辺に絵屋を称する人物をあまた擁しており、遺例にみるとおり、世俗画の世界で業績をあげていた。こうした業態はこの宗雪の時代まで続いたと思われ、宗也の没後も絵屋との関係は続いていたと考えられる。しかし、仲家本系譜の原本がこの宗雪によって作成され、権威化が図られたことをみても、彼が家業の安定に危機感を持ちはじめていたことが推測される。系譜における雪舟からの画系を後裔が意識するのはこの時代からではないかと考える。

宗清 寛文9年(1669) - 元文2年(1737) (表2-39)

宗雪の長男。仲家本では八代とする。また等霖といい、宅昌齋と号したという。旧記本系譜に父と同じく宇右衛門と称したとある。享保13年(1728)祇園社に鍾馗図額を奉納している⁽²⁸⁾。元文2年(1737)11月6日に死去。行年69歳。法名は畫誉宗寂信士。信行寺に葬られた。妻は宝暦4年(1754)9月15日に没するまで、家内を取り仕切ったものと考えられる(表2-45)。仲家本過去帳から息子三人、娘二人の存在が確認されるが、息子二人と娘一人は宗清在

世中に亡くなった。残る息子は幼い時に川端家に養子に出され後に長谷川家に戻った等潤、女子は京都西七条の酒屋甚七に嫁いでいる（表2 - 58・66）。

宗清の代になると次第に絵屋との関係も薄れてきたらしく、宗雪没後にあたる元禄13年（1700）の絵屋権左衛門孫（表2 - 32）の忌日を最後に過去帳から長谷川家以外の絵屋を称する人名は見られなくなる。宗清が一人残る息子を養子に出し、娘の養子縁組を計っていないことは、家業の継続を諦観していた可能性があるだろう。この宗清の動きは、絵屋としての長谷川家が時代の変化に対応しきれなくなっていた可能性をうかがわせるものである。ただ、結果として宗清の没後、その弟子や遺族は家業の継続を希望し、等潤の項で述べるとおり、息子の養家である川端家の事情も幸いして、長谷川家は存続したのである。このときの画業の断層が、長谷川家に絵仏師へ転身する契機を与えたと考えられる。

宗清の門人に青地香霖（貞享4年（1687）-寛保2年（1742））がいる（表2 - 42）。仲家本系譜では九代とする。旧記本系譜では姓を青池としており、風儀斎と号したという。仲家本系譜には、宗清が亡くなった時、等潤はまだ幼いため、香霖が九代を継いだとしている。仲家本過去帳にも香霖を九代としながらも等潤後見人と記している。宗清が没した元文2年（1737）から没年まで、香霖が九代を称したと考えて問題ない。寛保2年（1742）死去。行年56歳。墓所は不明である。

等潤 享保10年（1725）-寛政10年（1798） （表2 - 59）

宗清の子。等淑ともいい、仲家本系譜では十代とする。幼名三十郎。自足庵または雪篁斎と号したという。仲家本系譜によれば等潤は幼い時に川端氏の養子となったが、等潤9歳のとき養父が亡くなり、養母とともに長谷川家に戻ったとされている。仲家本過去帳の序によりこの川端氏は川端八兵衛と名乗ったことがわかるので、同過去帳に見える糺屋八兵衛（表2 - 41）がその人であるとわかる。しかし過去帳の序によれば9歳から養父母への孝養を尽くしながら画を学びはじめ、その後養父母とともに長谷川家に戻ったとしている。どこかで記録の読み違いがあったと思われるので、これを検証しておきたい。まず実際に養父がなくなったのは、過去帳より元文6年（1741）等潤17歳のことである。元文2年（1737）等潤13歳の年に実父宗清が亡くなるよりかなり後の事のことであり、養父の死後長谷川家に戻ったと考えるより、過去帳に見るとおり養父母ともに長谷川家に戻ったとする伝に従うほうが合理的で、矛盾がない。その時期はやはり宗清が没した年と見るのが理解しやすい。養父は長谷川家で亡くなったことになる。

門人青地香霖が宗清の跡目を継ぐことになったのは、記述のとおり画を学びはじめて5年にしかならない等潤では、たとえ跡目を継いだところで家業が立ちゆかない現実があったのだろう。仲家本過去帳にも香霖を九代としながらも等潤後見人と記している。こうした差配にあっては宗清の妻の役割を考えるべきであろう。養家の屋号である糺屋は、もちろん酒や味噌の製造に用いる糺を扱う商家と考えられる。宗清の姉が酒屋甚七のもとに嫁いでいることと無関係ではあるまい。

等潤は川端家にいながら9歳から絵を学び始めた。宗清在世中は宗清に学んだ可能性はあるが、やはり教授の中心となったのは香霖であったろう。養父に特別の理解があったことが、等潤の長谷川家復籍に結びついたものと思われる。寛保2年(1742)に師の香霖が亡くなり、家督を継ぐことになったものの、画業10年では、学び足りない点があった。香霖の死は恐らく突然なものであったと考えられる。ただ、たまたま宗清に画法を学んでいた中川周保という画家がいたため、これに学んで家業を継承することができたと伝える。

中川周保は逸伝の画家だが宝暦11年(1761)9月16日まで生きていたので、等潤は20年近く周保の教えを受けることができた。周保が長谷川家の過去帳に記されたことを見ても、その貢献は大きなものがあったのであろう(表2-47)。誓願寺辻子の浄土宗光明寺に葬られたというので、宗旨つながりがあったらしい。この周保は狩野派と長谷川派双方に学んだとされるが、能満院粉本中にみる《毘沙門曼荼羅図》の原本は周保在世中の寛延3年(1750)に長谷川家の絵師によって描かれていることを考えれば、長谷川家が絵仏師として展開する際、周保が重要な役割をなした可能性がある。

この《毘沙門曼荼羅図》原本を描いた長谷川喜右衛門の名は、系譜、過去帳には見いだせないが、宗清、香霖が既に亡くなっている寛延3年の時期に長谷川家で該当するのは等潤しかない。養子縁組や復籍など複雑な境遇にあったため等潤の名が全て伝えられているか不明であることに加え、等鶴がこの図を模写する動機を考えて見れば、喜右衛門をその父長谷川等潤の名と見るのが合理的である。《毘沙門曼荼羅図》が落成する寛延3年に、等潤は26歳になっており、長谷川家を継いで8年が経つ。この考えに立てば同粉本の墨書から喜右衛門すなわち等潤は当時京極通五条上ルに住んでいたことになる(図1)。等潤は晩年天明8年(1788)の火災で焼け出され、旧記本系譜の等鶴の記事から考えて綾小路東洞院西入ルに移ったと見られる。寛政10年(1798)8月18日死去。行年74歳。法名を浄心秋月禪定門といった。

妻は二人おり、等鶴の母となるのはりくという若狭国新道村の長右衛門の娘である。宝暦12年(1762)11月22日に亡くなった(表2-50)。そして息子等鶴がまだ小さかったのが理由であろう、等潤はおなつという後妻を娶っている。こちらは天明元年(1781)12月3日になくなった(表2-57)。過去帳には縁者として享和3年(1803)になくなったおなつの母妙光の名が見える(表2-63)。等潤には少なくとも息子が六人と娘が一人いたことが過去帳からわかるが、息子三人(表2-49・53・54)と娘一人(表2-56)は幼くしてなくなっており、等鶴の弟にしても一人は二十代でなくなっている(表2-61・65)。

仲家本過去帳によれば、長谷川家の檀那寺は浄土宗の信行寺であったが、このころ宗論があって、等潤は明和年間に養父母川端氏の檀那寺であった浄土宗天性寺に改めたという。これは、仲家本過去帳の記録からも糶屋の人物以外の名に天性寺墓所の注記を記録するのがこの頃にはじまるので、信憑性がある。そのため等潤は父宗清の墓所と異なる天性寺榮源院に葬られることになった。ただ、仲家本過去帳の序によると榮源院は天明大火後廃寺となっているので以後は天性寺を檀那寺としたのであろう。また川端家には娘がいたが、等潤が生まれる前に亡くなっていることが仲家本過去帳に記されている(表2-37)。

等鶴 宝暦7年(1757) - 文化7年(1810)

(表2 - 67)

等潤の子。等廓また等郭とも書いたらしい。仲家本系譜では十一代とする。字は信房。俗名を賀一といった。能満院に所蔵される長谷川本の中にある《長谷川等観像》(表1 - 180)は、自画自賛として道歌が詠まれており、款記に「等伯七代孫」と記されている。これは等伯から七代目の子孫の意に解され、その下に等郭の印が写されているので、等郭すなわち等鶴の自画像と考えられる。したがって等鶴は等観とも称したことになる。信仰に篤かったと思われる父等潤と同様、道歌を詠んでいることから、仏画を得意とし、高野山の画事に与ったという仲家本系譜の記事に信憑性を与える。天明8年(1788)の火災で焼け出され、父等潤とともに綾小路東洞院西入ルに移った(図1)。能満院の長谷川本の中には等鶴本の模本が相当数残されており、大火以後、画作の中心が等鶴に移ったことが推測される。文化7年(1810)12月12日死去。行年54歳。天性寺に葬られた。妻は丹波国園部の畑宅之丞の娘で、天保6年(1835)7月22日に亡くなった(表2 - 60・62・70)。娘が二人あって長女は京都で加賀藩公に仕えた能の脇師春藤万右衛門の妻となり(表2 - 68・75)、次女は大坂に移った(表2 - 73)とされている。仲家本過去帳には大坂の真嶋隆舟の養子となった古山静齋の名が見え、大坂に関わる人物なので、あるいはこれがその父である医師古山齋宮と等鶴娘との間に生まれた子であったかもしれない(表2 - 82)。

等叔 天明4年(1784) - 天保12年(1841)

(表2 - 72)

等鶴の養子。仲家本系譜では十二代とする。字は信春。賀一郎と称す。父は江畑宗次郎といい、越中国東岩瀬(現富山県富山市)に生まれた。若年から絵を好み、京都に出て石田友汀(1756-1815)に学ぶという。28歳のとき長谷川家の養子に入る。天保12年(1841)10月10日死去。行年58歳。天性寺に葬られた。妻は82歳まで生きたが没年は不明である(表2 - 99)。等叔妻が等鶴の娘であるか否か記録がなく判断できないため、等叔が婿養子であったか養子縁組であったかは確認できない。子は息子一人と娘三人が確認される。息子は嫡男等舟であり、末娘は子供の内に亡くなっている(表2 - 69)。残る二人の娘は等舟の姉にあたり、一人はこうといい村上硯水という人物のもとに嫁いでいる。等叔の名賀一郎を継いだ村上姓の人物の母として記されるのがこの女性と考えられるので、その没年は明治26年(1893)7月25日である(表2 - 94・95)。今一人は長谷川閑子といい、奥州仙台の伊達家において近衛氏徳子(1850-1871)の老女をつとめた(表2 - 91)。徳子は伊達慶邦(1825-1874)の養女で、伊達宗敦(1852-1911)の正室となった女性で、仙台市の祥麟山伊達家墓所⁽²⁹⁾に墓がある。明治8年(1875)年6月27日に仙台で亡くなった閑子の墓も同所にある。墓石の銘によれば、享年53歳となっており過去帳の60歳と異なるが、53歳では等舟の妹となってしまうので、仙台では年齢を誤って伝えていたことがわかる⁽³⁰⁾。

等叔は父祖父同様仏画を描き、長谷川等叔筆とされる《太元帥明王像》が高野山宝寿院に遺る⁽³¹⁾ところを見れば、高野山の画事は等叔の代も継続していたと思われる。長谷寺版両部曼荼羅の下絵はこの等叔が描いている。また、等叔の作としては滋賀県栗東市新善光寺の《善光

寺如来縁起》6幅の存在も知られている⁽³²⁾。長谷寺版両部曼荼羅の版木の箱に当時の住所が書かれており、このころ長谷川家が烏丸仏光寺に移っていることがわかる(図1)。また、郷里に近い富山県八尾町下新町の八幡社には等叔が文政5年(1822)に描いた《絵馬》がある⁽³³⁾。等叔は石田友汀(1756 - 1815)に師事したと伝えられており、世俗画を描く画力もあったと考えられる。ちなみに石田幽汀(1721 - 1786)の次男である友汀は名を叔明といった。等叔の叔は友汀の名をとった可能性がある。

等叔の在世期に長谷川家の制作に関わっている数馬という人物(表1 - 40)については、長谷寺版両部曼荼羅の下絵にも助力しているが⁽³⁴⁾、過去帳にはこれに該当する人物が見当たらないため、弟子と考えるべきであろう。

等舟 文政元年(1818) - 明治4年(1871) (表2 - 86)

等叔の子。仲家本系譜では十三代とする。通称賀一郎。ただし、天保4年(1833)長谷川理吉郎書写とされる《普賢菩薩像》の存在は、等舟の初名が理吉郎である可能性を示している。このとき父等叔すなわち賀一郎が存命であるところから、親子が共に賀一郎を名乗っていたとは考えにくく、賀一郎は等叔没後に使用したとするほうが理解しやすい。息子等榮が力吉郎と称したことも考え合わせると、この逸伝の名理吉郎は等舟の初名である可能性がある。

仲家本系譜に高野山金堂脇壇に掛けられる弘法大師像と四社明神像を描いたという。この作品は昭和元年(1926)の金堂火災により焼失しているが、両幅は現在も新たに描かれたものが掛けられているとおり、金堂を荘厳する画幅として描き継がれるものであり、その制作に与っていたことは長谷川家に対する高野山内の信頼が確立していたことをうかがわせる。万延元年(1860)に落成した金堂の堂内彩色は長谷川家が担当したことが記され、このときの粉本は現在も仲家に遺されている。また仲家本系譜には龍光院の瑜祇塔の彩色についても、長谷川家はその彩色下図を所持する旨記しており、能満院の粉本のなかに高野山竜光院瑜祇塔の装飾図が混じるのは長谷川家経由と見るべきであろう。病を得て、明治4年(1871)7月28日高野山小田原報恩院で死去。仲家本系譜には高野山奥院の報恩院墓地に葬られたとあるが、過去帳には天性寺の文字が記されているので、後に移された可能性がある⁽³⁵⁾。行年54歳。法名は秋岳長榮信士。妻はひさといひ明治16年(1883)11月13日に57歳で亡くなっている(表2 - 93)。仲家本過去帳から息子五人と娘六人が確認できる。二男三男(表2 - 79・84)は早世しており、長男等榮と四男等宗が画名を継いだ、五男与三郎は村上家を継いだという。この村上家は等叔の娘が嫁した家であろう。娘六人のうち三人(表2 - 76・80・85)は早世し、長女も短命であった(表2 - 77)。娘一人は村上硯水の養女となったが、明治9年(1876)に亡くなっている(表2 - 92)。等榮の妹で等宗の姉にあたる禮は明治を生きている。

金堂落成後も高野山での制作が続いており、金剛峯寺には、文久3年(1863)の《愛染明王十七尊曼荼羅図》及び明治2年(1869)の《仁王経大曼荼羅図》が残されている⁽³⁶⁾。

等榮 嘉永2年(1849) - 明治4年(1871) (表2 - 87)

等舟の長男。仲家本系譜では十四代とする。通称力吉郎。父等舟とともに高野山に登り、報

恩院に寄寓して父の仕事を助けた。父同様、病を得て明治4年（1871）8月28日高野山小田原報恩院で死去。仲家本系譜には高野山奥院の報恩院墓地に葬られたとあるが、過去帳には天性寺の文字が記されているので、後に移された可能性がある。行年23歳。妻子については不明である。法名は宝山明栄信士。

等宗 文久2年（1862）-明治42年（1909）

等舟の四男すなわち等栄の弟。等栄が夭折し跡継ぎがなかったため弟が画業を継いだ。仲家本系譜では十四代とする。過去帳は明治26年（1893）の記述が最後となるため、等宗の名は見えない。本名富次郎。明治初期に京都で田村宗立に洋画を学び、やがて東京に移るも技師として鉾山業に関わり、栃木県の足尾銅山、福島県の軽井沢銀山と居を転じた。晩年は名古屋に移り、輸出陶磁器の絵付けを行うため森村組に勤めたという。これは、森村組がアメリカへの日用食器を拡大するため、明治29年頃から名古屋に全国の画工場を集約するようになった動きの中で、富次郎もその一角に加わったということであろう。ただし、当時いくつかの画工場があったなかで、どの工場に属していたかは不明である⁽³⁷⁾。明治42年（1909）2月17日京都の村上家で亡くなる。行年48歳。法名は喜法歆順禪定門。後に等宗の長女ナツは等舟弟子仲又七の長男市太郎と結婚し、長谷川家の画系が仲家に継承される⁽³⁸⁾。

5. 憲海と長谷川家

憲海と長谷川家との出会いは長谷寺修学時代にはじまる。現存する最古の長谷川家関係資料は、文政9年（1826）に撰津楠葉の久修恩院で写した長谷川等鶴による金剛界曼荼羅の荘厳関係粉本（表1-1-11）である。これは長谷川家が両部曼荼羅の制作に手を染めていたことを示す資料として貴重である。

文政12年（1829）に長谷寺で開版した《両部曼荼羅》の制作において、長谷川等叔が絵師として抜擢された要因として、憲海と長谷川家の手になる粉本との出会いがあったと考えるのは合理的である。憲海は長谷寺版の開版に協力しており、当時京都とも往復していたから、等

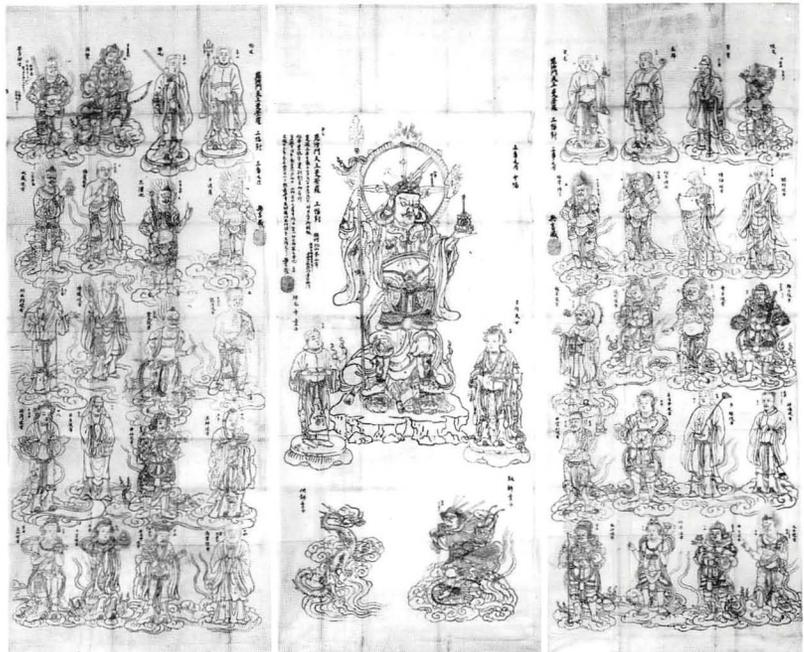


図2 毘沙門天曼荼羅図

叔との面識はこのときまでにはあったと見るべきである。

同年5月に憲海は長谷寺において《毘沙門天曼荼羅図》(表1-13・14・15)(図2)を写しているが、その原本は摂津国本山寺において寛延3(1750)年12月に落成したものである。これは、松平資訓(1700-1752)の寄付により長谷川喜右衛門が描いたものであったことが記され、憲海が長谷寺で写したのは、この原本を寛政10年(1798)6月に京都山科花山の元慶寺において長谷川賀一と伊之助が写した粉本であったという。在世から考えてこの賀一が等鶴であることは明らかである。では、伊之助は何者かといえ、仲家本過去帳に見える寛政12年(1800)に亡くなった等鶴の弟であろう(表



図3 孔雀明王像

2-61)。先に述べたとおりこの《毘沙門天曼荼羅図》原本を描いた長谷川喜右衛門は、等潤と考えられ、長谷川家累代の図像の継承を見ることができる。

文政12年6月に憲海は智積院の《孔雀明王像》(表1-16)(図3)を写している。ただし智積院方丈が所有する原本から直接写すのではなく、享和元年(1801)8月に等鶴が写した模本からであった。書写場所は明らかにしていないが、特に記していないところから智積院内であったと考えてよいだろう。この等鶴本には彩色の記録がなかったと思われ、憲海が会津を離れ京都に入って後の嘉永元年(1848)に高山寺の僧護(1775-1837)からその模本の提供を求められた際、憲海は、智積院中寮において原本と彩色を校合している。また、場所は不明ながら天保2年(1831)10月にも等鶴による《天蓋・宝冠・龍・飛龍図巻》(表1-17)を写しているところから、長谷寺時代の憲海は、各所で長谷川家の粉本に接していたことがわかる。

長谷寺版開版以後、憲海は絵仏師である長谷川家を意識せざるを得なかったはずである。等鶴はすでに亡かったが、長谷川家当主の等叔とは知己となり、等鶴の粉本もすでにくいつか写し取っていた。仲家本系譜にあるとおり、天明8年の大火は、長谷川家に系図すら焼失させる被害をもたらし、家蔵の粉本類もその火中に多くが失われたと考えられる。しかし、等鶴が行ったように機会があれば先代の図像を写すという行為は少なからず繰り返されたと考えられ、長谷川家の粉本も徐々に補われたはずである。長谷寺版開版の事業にあたって長谷川等叔を推

した者が誰であったかは分からないが、憲海の見識が関与する部分があった可能性は高い。

憲海らが山王寺に入った頃の長谷川家といえば、等叔はすでに亡く、等宗は生まれたばかりで、等舟一人が弟子たちと仕事をする状態であった。高野山の画事に与った長谷川家にとっては、天保14年(1843)に焼失した金堂再建事業への参加が大きな課題となっていた時期である。等舟が高野山に赴くことも多かつたはずで、いまだ行く先の落ち着かない憲海らが長谷川家に助力することがあったとしても不思議ではない。実際大成の写した《如意輪観音像》(表1-140)には「依長谷川頼ニヨリ校合之」という墨書があり、長谷川家に協力した記録が残っている。また憲海らが長谷川家から注文を受けることもあった(表1-169)。

能満院粉本中の長谷川家関係資料には元粉本の作者の名が記録されているものがあり、等鶴に関係するもの46点、等叔に関係するもの26点、等舟に関係するもの2点が数えられる。等潤の名が見られないのは大火の影響であろう。墨書の内容を見れば憲海たちは先代等叔以前の粉本を意識して長谷川本の収集を行ったようである。多くは長谷川家で写したもののだが、山王寺に借用した場合もあった。

一般に絵仏師たち職業画家は、効率的に制作を行うために、利用の便を考えて粉本を整理する。長谷川家においてもこれは行われていたと考えてよいだろう。図像を収集することにはさしたる苦勞のなかった憲海たちも、その普及のため組織的に工房を運営するとなれば、粉本の整理や分業体制などさまざまな課題を解決する必要があった。憲海がそれまで具体的に知ることができた画家の工房といえば会津の萩原盤山⁽³⁹⁾の工房くらいであったから、図像の普及を大願とした憲海たちにとって、組織力を備えた仏画工房から学ぶところは少なくなかったはずである。実際に能満院に入った憲海は受注を受けた仏画制作において長谷川等鶴の図像と校合している例(表1-143・148・151・155・157・158・159・160)があり、長谷川家の経験と知識に対し信頼を置いていたことがわかる。憲海らが長谷川家において学びとったのは絵仏師工房に関する多くの情報である。その柱の一つは粉本の図像に関するものであり、いまひとつが仏画工房の運営に関するものであったと考える。

憲海と長谷川家の交わりは能満院移転後も継続したと思われるが、嘉永5年以後は、ほとんど交流のあとが見られない。この頃になると等舟らは高野山での仕事に集中するために烏丸の工房を不在にせざるを得なかったものと思われる。元治元年の兵火が長谷川家を巻き込んだにもかかわらず、仲家に現在も長谷川家の粉本が遺されているところを見ると、当時等舟らとともに、長谷川家の粉本も高野山に移されていた可能性がある。等舟らは万延元年(1860)年の金堂落成後も高野山に留まり仏画制作に関わった。これは、仲家本系譜の記述と、等舟による金剛峯寺所蔵仏画の存在により確かめられる。

6. 絵仏師たちの活動

このように、憲海と長谷川家の関係を概観すると、憲海が図像の収集を行った文政年間には、長谷川家の粉本が畿内各所の寺院に収蔵される状況が生まれていることが分かる。本山寺は天台系寺院であり、久修恩院は真言律系寺院、長谷寺は新義真言宗と、特定の宗派への偏りは見られない。長谷川家は宗也の代に浄土宗に改宗しており、特に宗旨つながりのない工房であっ

たと考えてよい。

能満院粉本中の長谷川家本を見ると、いくつかの特徴をあげることができる。まず仏画の対象として、別尊曼荼羅のように儀軌に従った図像上の見識を必要とするものが含まれており、古画を参考にしてよく端整な制作を行っていること、如来から天部に至る仏教の諸尊のみならず垂迹神に至るまでを描いていること、諸宗幅広く高僧像の対象としていることがあげられる。高僧像が全体の四割ほどを占めているのは、絵画の需要がこの分野に厚かったことを示すのであろう。長谷川等伯の初期の活動が、仏画と肖像画に特徴付けられることを見れば、奇しくも先祖帰りを見せている。等鶴が描いた《千利休像》(表1 - 179)は先祖等伯と千利休の関係を確認する作例だが、等伯の描いた図を使って面貌を描いており、等伯以来の伝統に対する意識の表れをうかがわせる。肖像画については《日潮像》(表1 - 121)のように元文3年(1738)の制作と思われる資料があり、宗清の時代から注文を受けていた可能性がある。あるいは仏画に先行して高僧像の制作が発生していたことが考えられる。

天明8年(1788)の火災が長谷川家にもたらした被害が相当大きなものであったことは、想像に難くない。憲海らが山王寺に寄寓した弘化4年(1847)以降に長谷川家粉本から写した粉本の墨書を見ると、天明8年を遡るものは少なく、また等潤以前の作者による粉本は確認できない。

憲海の修学当時、長谷寺で「豊山御絵所」を称したのは京都の森田家であった⁽⁴⁰⁾。《两部曼荼羅》開版に際し長谷川家が進出することになったのは、等潤、等鶴の世代に、絵仏師として長谷川家がかなり広範囲に事業を展開していた背景を考えるべきだろう。まず、粉本の墨書から、長谷川家への発注者または納品先を概観してみたい。

智積院(京都市東山区東瓦町)	《智積院僧正像》(表1 - 85)
大通寺慈眼院(廃絶)(京都府京都市南区八条町)	《釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)》(表1 - 54)
宝福寺(京都市伏見区帯屋町)	《宝福寺某僧像》(表1 - 135)
徳雲寺(京都府南丹市園部町)	《雪山像》(表1 - 122)
比叡山西塔金光院(廃絶)(滋賀県大津市坂本)	《虚空蔵菩薩像》(表1 - 45)
金輪院庚申堂(奈良県大和郡山市小泉)	《胎蔵界大日如来像》(表1 - 41)
聖林寺(奈良県桜井市)	《毘沙門天像》(表1 - 97)
本山寺(大阪府高槻市大字原)	《毘沙門天曼荼羅図》(表1 - 13)
天満寺宝珠院(大阪市北区与力町)	《地藏菩薩矜羯羅制吒迦像》(表1 - 58)
	《普賢菩薩像》(表1 - 105)
妙法寺(大阪市東成区大今里)	《釈迦十六善神図》(表1 - 62)
月江院(廃絶)(大阪市浪速区元町)	《月江院某僧像》(表1 - 110)
願正院(廃絶)(大阪府堺市北区金岡町)	《地藏菩薩像》(表1 - 63)
地藏院(廃絶)(大阪府天王寺区生玉)	《道雄像》(表1 - 170)
久遠寺(山梨県南巨摩郡身延町)	《日潮像》(表1 - 120)
宝集寺(石川県金沢市寺町)	《五大明王像》(表1 - 26)
宝嶋寺(岡山県倉敷市連島町)	《愛染明王》(表1 - 25・44)

玉泉寺（岡山県真庭市鉄山）	《光明真言字輪曼荼羅図》（表1 - 40）
玉毫寺（佐賀県小城市三日月町）	《恵雲像》（表1 - 134）

こうした記録が残されているものは、全体からすれば一部に過ぎないが、ある種の傾向を見ることはできる。当然のことながら地元である京都からの注文が多い。古義真言、新義真言、天台、曹洞禅と諸宗派からの依頼を受けていることがわかる。さらに近江、大和、摂津、河内、和泉、丹波と京都の周辺のかなり広い範囲からの注文を受けており、絵仏師としての評価が確立していたことがうかがえる。加えて加賀、備陽、肥前方面からの注文があるのは、取次ぎを介した制作を受けていたことを示しており、受注体制が整備されていたものと思われる。また、日潮像の制作のようにかつての長谷川家の宗旨であった日蓮宗寺院との関わりが存続していることも注目される⁽⁴¹⁾。

次に、長谷川家が粉本の作成にあたり原本からの模写を行ったと思われる記録は、原本の所在地で写した可能性があるため、彼らの行動範囲をうかがう参考になる。

智積院（京都府京都市東山区東瓦町）	《孔雀明王像》（表1 - 16・84）
東寺（京都府京都市南区九条町）	《地藏菩薩像》（表1 - 63）
	《辨才天像》（表1 - 167）
二尊院（京都府京都市右京区嵯峨）	《勢至菩薩像》（表1 - 55）
元慶寺（京都市山科区北花山）	《毘沙門天曼荼羅図》（表1 - 13）
光明寺（京都府長岡京市粟生）	《法然（円光大師源空）像》（表1 - 73）
延暦寺横川（滋賀県大津市坂本）	《阿弥陀三尊来迎図》（表1 - 56）
	《地藏菩薩矜羯羅制吒迦像》（表1 - 58）
薬樹院（滋賀県大津市坂本）	《辨才天十五童子像》（表1 - 27）
大福寺（奈良県北葛城郡大陵町）	《毘沙門天像》（表1 - 97）
妙法寺（大阪市東成区大今里）	《愛染明王》（表1 - 25）
華林寺（蜂田寺：大阪府堺市中区八田寺町）	《役行者像》（表1 - 43）

この記録からは、京都に拠点を置く長谷川家の活動範囲が、近江、大和、摂津、河内に及びかなり広域である様子が窺える。これは先の注文者の分布に対応したものと見えるだろう。受注制作を基本とする絵仏師の活動が、行動的な性格を持つことが理解される。長谷川家が特殊な尊像や図像に対しても対応できる見識と技術を持っていた背景には、こうした広範囲な活動の中で得られた、情報と経験の集積があったことを評価すべきであろう。

先に述べたとおり高野山には金剛峰寺と宝寿院に等叔、等舟の作が確認されているが、等叔は太元帥明王を描くのに高野山西南院所蔵の古図に図像を求め⁽⁴²⁾、また等舟も愛染明王十七尊曼荼羅を描くのに、家蔵の粉本とは異なる特殊な図像によって描くなど、図像に対する研究姿勢が表れている⁽⁴³⁾。古画に学ぶ制作態度が長谷川家の制作を支える柱のひとつであることがわかる。高野山には近世の仏画が多数残されており、各絵師の技法的特徴が解明されることによ

って、長谷川家の作例は、もう少し拡大する余地があると考ええる。

天明8年の大火は、市中を広範囲に焼き尽くした。このとき長谷川家も被災したが、被災地は革堂、因幡堂、六角堂といった庶民信仰の中心地を含んでいる。『京羽二重』には木村了琢ら四人の仏絵師の名があげられているが⁽⁴⁴⁾、彼らのうち三人がこの近隣に集住していたことを考え併せると、需要があり交通の便のよいこの地域には、早くから絵仏師たちの工房が集中していたことが推測される。そのため天明大火では、彼ら多くの絵仏師もまた被災を免れなかったのである。

京都は古刹が多く、絵仏師たちはそれぞれ背景とする歴史の中で顧客を獲得していたが、大火の被害を受けて事業を縮小する者がいたとしても不思議はない。それまでの絵仏師の勢力は一部解体を余儀なくされたことが推測される。そこに後発で絵仏師の世界に軸足を定めた長谷川家が事業を拡大する余地が生まれたものと考えられる。

能満院粉本の中には、長谷川家以外にもそうした京都の絵仏師の活動を示す資料がある。長谷川家関係粉本ほど多くはないが、能満院外で制作された粉本をそのまま入手して加えたものである。代表的なのは、遠藤満智、遠藤弁蔵という名が残る遠藤家の絵師が制作したもので、「皇都画師遠藤満智所持」と書いたもの(表3-10)があるところから、京都の絵仏師であることがわかる。その数は54点だが、年号を見れば天明9年(1789)から文政10年(1827)までの約40年にわたる年号が見られる(表3)。これらを手入するに至った経緯は不明である。相当数の粉本がありながら六角堂能満院の蔵印が捺されたものしかなく、憲海個人の所蔵印が見られないので、入手時期は山王寺に寄寓して以後と考えられる。

その内容を見れば8割が高僧像であり、天台宗、浄土宗、禅宗の祖師、高僧を対象としている。そして、残る10点の粉本の主題については、光明真言字輪曼荼羅図、出山釈迦像、釈迦五百羅漢図、阿弥陀二十五菩薩来迎図(図4)、楊柳観音像、虚空蔵菩薩像、不動明王像、水天像が並び、諸宗に関わる画像を制作していたことがわかる。粉本の墨書に自ら「仏画工」と書くことから遠藤家が仏画を専門とする職業画家であることは明白である。京都にあって層の厚い需要が期待できる



図4 阿弥陀二十五菩薩来迎図

天台、浄土、禪の三宗に顧客を持ち、祖師をはじめとする肖像画を中心に制作を受け、尊像も比較的利用の場が多いものを得意としたようである。肖像画については町絵師として一定の水準にはあると思われるが、粉本群として見れば、遠藤家は典型的絵仏師の家と見るほかない。憲海らが写したものは1点もなく、憲海の認識の中では、明らかに長谷川家に対する評価と異なるものがある。縁あって入手した粉本を参考資料として架蔵したのであろう。

また、ほぼ同じ頃の京都に山口家という絵仏師の家があったことも分かっている。山口家関係の粉本は8点と少ないが、明和2年(1765)から文化10年(1813)のものまでが残されており、古いものから山口春水堂、山口蘭舟子、山口明雅、山口城照という順に自筆粉本が残されている(表4)。「京兆室佛舎山口明雅」という記述から室町仏光寺周辺すなわち長谷川家からさほど離れていないところに工房のあった可能性がある。興味深いのは天明5年(1785)に山口蘭舟子が写した《虚空蔵菩薩像》(表4-2)(図5)で、これは原本が六角堂能満院のものとしてされており、憲海らが入る以前のことではあるが、山口家が能満院と関係のある工房であったことを教えてくれる。遺された図像は多賀明神像、虚空蔵菩薩像、軍荼利明王像、善女龍王像、七尊図、釈迦十六羅漢図、地藏菩薩像となるが、独尊絵像が中心ながら、特殊な図像を含む点が注目される。



図5 虚空蔵菩薩像

また絵仏師として、高僧像の需要にも応えたことがわかる。また山口家に関わる資料として、仏師高井琮玄氏所蔵の《鞍馬毘沙門天正像》は蘭舟子が天明5年(1785)に鞍馬寺毘沙門天像を写生した粉本としてその活動状況を補う⁽⁴⁵⁾。山口家粉本については作者にばらつきがあり、しかも所蔵印が少ないため、入手時期は判断しがたい。

憲海が図像の収集を志す契機として、世に流布するところの仏画の質を憂えたことが伝えられているが⁽⁴⁶⁾、こうして長谷川家との関わりを見れば、彼が必ずしも当時の絵仏師に対して否定的立場を採っているわけではないことが理解される。憲海が求めていたものは、その描き手の質を問う以上に、描かれた図像の質であったと思われる。それを言い換えるならば優れた仏画よりも優れた図像を求めたといつてよいだろう。憲海らが版によって図像を普及しようとしたのは、彼が重ねた多くの出会いの中で自ずと帰結した結論であった。

表3 能満院旧蔵粉本遠藤家関係資料

通番	名称	材質技法	頁数	制作者	制作年	制作日	法量(縦)cm	
1	某僧像(合掌)	紙本白描	1枚	遠藤	天明9年	1789	01_??	56.8
2	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1枚	遠藤	寛政3年	1791	02_24	51.0
3	善導像	紙本白描	1枚	遠藤	寛政3年	1791	02_24	50.7
4	善導像	紙本白描	1枚	遠藤	寛政4年	1792	01_27	38.2
5	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1枚	遠藤	寛政4年	1792	01_27	38.6
6	天台智者大師智顛像	紙本白描	1枚	遠藤	寛政4年	1792	08_01	109.6
7	慈眼大師天海像	紙本白描	1枚	遠藤	寛政6年	1794	03_24	51.5
8	楊柳觀音像	紙本白描	1枚	遠藤弁蔵	寛政10年	1798	04_27	69.3
9	某僧像	紙本白描	1枚	遠藤	寛政12年	1800	03_30	37.3
10	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤満智	寛政12年	1800	04U/11	67.8
11	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤満智	寛政12年	1800	04U/20	68.5
12	センリツ像	紙本白描	1枚	遠藤弁蔵	享和元年	1801	05_03	69.3
13	曹洞宗某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤満智	享和2年	1802	02_15	54.5
14	善導法然像	紙本白描	1枚	遠藤	享和2年	1802	08_12	42.5
15	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤弁蔵	享和2年	1802	08_17	46.5
16	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤満智	享和2年	1802	09_20	73.0
17	承陽大師希玄道元像	紙本白描	1枚	遠藤満智	享和2年	1802		27.5
18	洞山良价像	紙本白描	1枚	遠藤	享和3年	1803	01_06	52.2
19	高僧像	紙本白描	1枚	遠藤弁蔵	享和3年	1803	06_20	28.0
20	出釈迦像	紙本白描	1枚	遠藤満智	文化元年	1804	07_01	71.4
21	曹洞宗某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤満智	文化6年	1809	03_18	39.2
22	光明真言字輪曼荼羅図	紙本白描一部着色	1枚	遠藤	文化11年	1814	09_15	107.5
23	阿弥陀二十五菩薩来迎図	紙本白描	1枚	遠藤	文化13年	1816	09_01	156.2
24	虚空藏菩薩像	紙本白描	1枚	遠藤	文政元年	1818	07_04	55.5
25	聖心大師良忍像	紙本白描	1枚	遠藤	文政4年	1821	09_27	47.0
26	不動明王像	紙本白描	1枚	遠藤	文政4年	1821	09_28	37.1
27	黄蘗宗某僧像(持扨子・杖)	紙本白描	1枚	遠藤	文政5年	1822	05_??	47.2
28	善導像	紙本白描	1枚	遠藤	文政6年	1823	02_28	55.5
29	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1枚	遠藤	文政6年	1823	02_28	47.2
30	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤	文政7年	1824	11_30	45.0
31	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤	文政8年	1825	03_20	55.5
32	釈迦五百羅漢図	紙本白描	1枚	遠藤弁蔵	文政8年	1825	09_00	101.2
33	善導法然対面図	紙本白描	1枚	遠藤	文政8年	1825	09/13	18.5
34	善導像	紙本白描	1枚	遠藤	文政9年	1826	06_20	27.7
35	阿弥陀二十五菩薩来迎図	紙本白描	1枚	遠藤	文政10年	1827	04_00	102.8
36	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤満智	文政10年	1827	07_20	46.2
37	善導法然対面図	紙本白描	1枚	遠藤満智	江戸時代後期(卯)	19th century	07_28	96.0
38	承陽大師希玄道元像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期(卯)	19th century	08_07	36.5
39	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期(午)	19th century	08_29	74.7
40	某僧像(定印)	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期(卯)	19th century	09_??	28.0
41	出釈迦像	紙本白描	1枚	遠藤満智	江戸時代後期	19th century		81.3
42	水天像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		75.2
43	高僧像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		64.5
44	天台智者大師智顛像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		39.8
45	慈覚大師円仁像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		54.2
46	曹洞宗某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		54.9
47	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		38.7
48	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		27.7
49	善導像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		68.5
50	法然(円光大師源空)像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		69.5
51	辨長像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		45.5
52	祥空像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		83.5
53	辨長・良忠像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		28.1
54	虚空像	紙本白描	1枚	遠藤	江戸時代後期	19th century		48.4

表4 能満院旧蔵粉本山口家関係資料

通番	名称	材質技法	頁数	制作者	制作年	制作日	法量(縦)cm	
1	多賀明神像	紙本白描一部朱描	1枚	山口春水堂	明和2年	1765	??_19	56.6
2	虚空藏菩薩像	紙本白描一部朱描	1枚	山口蘭舟子	天明5年	1785	12_??	75.2
3	軍荼利明王像	紙本白描	1枚	山口明雅	寛政4年	1792	04_??	72.0
4	善女龍王像	紙本白描	1枚	山口明雅	文化2年	1805	08_12	119.3
5	某僧像(持扨子)	紙本白描	1枚	山口明雅	文化6年	1809	09_02	72.2
6	七尊図	紙本白描	1枚	山口明雅	文化10年	1813	06_12	92.0
7	釈迦十六羅漢図	紙本木版墨刷	1枚	山口城照	江戸時代後期	19th century		32.0
8	地藏菩薩像	紙本白描	1枚	山口城照	江戸時代後期	19th century		81.6

*1 京都市立芸術大学芸術資料館の収蔵番号

*2 法蔵館『仏教図像聚成』の図版番号

法量(横)cm	印章	墨書備考	収蔵番号*1	図録番号*2
33.5	A印	遠藤絵本]	130020838800	
24.7	A印	仏絵師遠藤絵本]	130020840802	聚成 -3245
24.5	A印	仏絵師遠藤絵本]	130020840801	聚成 -3244
26.5	A印	遠藤氏絵本]	130020842100	聚成 -3243
27.5	A印	遠藤氏絵本]	130020844000	
14.1	A印	仏絵師遠藤氏所持]	130020815400	
46.5	A印	遠藤氏]	130020812000	
41.7		仏画工遠藤弁蔵所持]	130020220300	聚成 -2038
26.3	A印	遠藤氏]	130020837100	聚成 -3239
40.8	A印	皇都画師遠藤満智所持]	130020838400	
40.0	A印	仏画師遠藤満智所持本]	130020834700	
32.8	A印	仏絵師遠藤弁蔵]	130020831000	聚成 -3238
40.0	A印	仏画工遠藤満智本]	130020838500	
28.0		仏画工遠藤氏本]	130020840700	
27.5	A印	仏画工遠藤弁蔵]	130020835800	
34.3	A印	仏画工遠藤満智本]	130020838000	
13.7	A印	仏画工遠藤満智之写] 洛陽宗仙禪寺]	130020837300	
40.9	A印	加州金沢天徳院之写] 仏画工遠藤所持]	130020836800	聚成 -3204
14.0	A印	遠藤弁蔵本]	130020812400	
34.5		古法眼写] 仏画工遠藤満智所持]	130020055600	聚成 -1105
24.0	A印	遠藤満智本]	130020835500	
39.0		仏画工遠藤氏所持]	130020031700	
77.4	A印	遠藤所持]	130020065800	
40.6		遠藤氏本] 雲雲寺様]	130020263300	
47.2	A印	遠藤] 大原融通寺ノ写]	130020812800	聚成 -3070
23.4		遠藤本]	130020303300	
28.0	A印	黄蘗宗語恵院] 仏画工遠藤所持]	130020836500	
23.2		遠藤氏]	130020842200	
23.7		遠藤氏]	130020842500	
19.5	A印	遠藤氏]	130020837600	
39.2	A印	越中高岡二塚村松月庵御詠] 仏画工遠藤氏所持]	130020839917	
39.0		仏画工遠藤弁蔵本]	130020056300	聚成 -1100
30.3		仏画工遠藤氏所持]	130020841400	
12.9		享保十四己酉曆林鐘中旬日] 遠藤]	130020840201	
47.0		仏画工遠藤所持]	130020066200	
27.3	A印	仏画工遠藤満智本]	130020839911	
39.8	A印	仏絵師遠藤満智本]	130020841300	
28.0	A印	遠藤氏]	130020839904	聚成 -3218
39.3	A印	遠藤所持本]	130020839200	
19.0	A印	遠藤氏]	130020837400	
39.1		古法眼写遠藤満智本]	130020055500	
40.0		遠藤本] 雲雲寺様]	130020422200	聚成 -2228
40.0	A印	遠藤弁蔵本]	130020730300	
28.3	A印	仏画工遠藤氏]	130020810200	
40.8	A印	仏画工遠藤氏]	130020810700	
40.0	A印	仏画工遠藤氏本]	130020831700	
27.5	A印	仏画工遠藤氏]	130020836700	
13.1		遠藤]	130020840202	
36.0	A印	遠藤氏]	130020840501	
36.4	A印	遠藤氏]	130020840502	
28.7	A印	遠藤氏]	130020843000	聚成 -3256
28.0	A印	洛陽五条万年寺] 遠藤本]	130020843100	聚成 -3271
27.7	A印	遠藤氏]	130020845700	聚成 -3255
34.5		遠藤氏]	130020846700	聚成 -3257

法量(横)cm	印章	墨書備考	収蔵番号*1	図録番号*2
39.3		春水堂山口氏<花押>] 京兆画工春水堂写之]	130020611700	聚成 -4079
50.2	E印, F印	京雒画工山口蘭舟子写] 求本六角堂能満院]	130020262800	聚成 -2092
41.3		紫燕亭写寸]	130020341400	
44.2		山口明雅]	130020470200	聚成 -2188
34.5	A印	京兆室仏舎山口明雅] 妙心寺]	130020831400	
37.5		山口氏紫燕写]	130020067300	聚成 -1182
19.7		皇都画工[]城照拝図]	130020056500	
30.3		山口城照写]	130020252700	

A印： (重郭朱文朱方印) 王城中眞六角堂ノ頂法寺内能満院]

E印： (朱文門印) 山口氏]

F印： (白文方印) 孺翁]

7. おわりに

長谷川家の画系を継承する仲家には、近世の長谷川家が守り伝えた粉本が多数残されている。桃山時代に源流を持つ画系が、現代に至るまでその系譜を存続させ、なおかつ火災などの困難に遭いながらも、家業の象徴たる粉本を伝えている点は稀有の事例といえる。膨大な粉本が所蔵者によって公開されるときがくれば、本稿に論じた内容の確認または修正を行うことができるに違いない。

一般の町絵師工房に対する美術史上の評価の低さに加えて、江戸時代後期の仏画に対する無理解が、江戸時代の長谷川家に対する興味を失わせているのは事実である。しかし政治的に安定しており、仏画に対する需要も供給能力も高かった江戸時代は、その製作量と普及の程度から見れば決して仏画の暗黒期ではない。儀軌に対する無知や粗漏な作画に陥る例が総体に多かったことは確かに否定できない現実であるが、その一方で、多くの学匠が生まれた江戸期の教学は、仏画にもまたあるべき姿を求めることは自然の展開であった。

無記名で制作されることが多い仏画では必ずしも作者がわかるとは限らないが、それでも木村了琢の名で知られる木村家や神田宗庭の名で知られる神田家のように、作者の記録が残りやすい例もある。この長谷川家などはまだ作者の名が伝えられている絵仏師といえる。近世において教学復興の潮流は決しておろそかなものではなかったが、それに比して経軌に則り仏画が描ける絵師は得難かったのである。興味深いのは、当時京都の絵仏師として著名であった木村家の図像については能満院粉本の中に《十二天像》《徳川家康（東照神君）像》の2件しか粉本がないことである⁽⁴⁷⁾。確かに木村家は天台系寺院の注文を受けることが多いが、憲海が天台系の図像も集めていることからすれば、それが大きな問題であったとは考えにくい。縁がなかったといえればそれも重要な理由であろうが、木村家の画像に対して憲海があまり興味を示さなかったところに、憲海の思考の機微があるように思える⁽⁴⁸⁾。

幕末期に図像の収集と普及を祈願した憲海は、長谷川家との出会いによって、自分自身の行うべき方向を確認したに違いない。巧みではあったが、絵仏師としては素人である憲海が、得意の板刻によって図像を普及させようとするのは、決して気まぐれや思いつきではなかったと思われる。高野山金堂の彩色にも対応できる長谷川家は、絵仏師の工房としては組織的な活動を可能とする体制を持っていた。憲海個人の活動だった図像収集を、大義を以て工房を起こし事業化するには、当然幾つもの障害を乗り越える必要があった。長谷川家の存在は、この課題の克服にあたって身近な指標として機能したに違いない。

《注》

- (1) 憲海（1798-1864）会津に生まれる。林岳、無言藏、大願と号す。長谷寺に修学し、会津喜福院に住したが、後にこれを辞して入洛し、六角堂能満院に住して仏画・出版の工房を主宰した。
- (2) 大成（1821-1891）越後に生まれる。星高とも号す。憲海に師事し、憲海とともに入洛して、能満院の工房を補佐する。『御室版兩部曼荼羅』の開版に協力した。
- (3) 京都市下京区室町通仏光寺下ルにあった山王神社の別当天台宗山王寺総持院は、明治維新後廃寺となり日吉神社のみが同地に残る。かつては天台座主によって山王祭が行われたことが『拾遺都名所図会』『京都坊目誌』に書かれている。
- (4) 現光（生没年不詳）。関東の出身と思われるが来歴不明。憲海との合作に「資現光」と記す粉本があるので、

何らかの師弟関係があると考えられる。憲海らが能満院に移転後関東に移っている。

- (5) 『古画備考』の記事に宗也系の末裔として名が見えるのは、長谷川家と認識されている宗也（新之丞）と宗清のみ。等作と等譽は長谷川家の者と考えるべきだが、雪舟弟子という記事のみで長谷川家という認識がない。等潤以下は見えない。
- (6) 土居次義「長谷川等伯画攷」「長谷川左近に関する一考察」「アメリカで見た長谷川左近」「長谷川左近と長谷川等重」「長谷川宗宅について」「長谷川宗也に就いて」「長谷川宗也考」以上は土居次義『長谷川等伯研究』（講談社、昭和52年6月）に収録。山根有三「長谷川宗宅等後研究」「長谷川左近・宗也・等憶・信近などの画業について」「長谷川等秀・等学研究」以上は山根有三『桃山絵画研究 山根有三著作集六』（中央公論美術出版、平成10年6月）に収録。
- (7) 宮島新一『長谷川等伯』（ミネルヴァ書房、平成15年11月）、197-201頁。
- (8) 土居前掲注6書、193-4頁。
- (9) 慶長5年（1600）に落成した本法寺《涅槃図》に記された款記。
- (10) 『七尾町旧記』（金沢市立玉川図書館近世史料館（加越能文庫）所蔵）は土居前掲注6書216頁に影印翻刻がある。本資料の長谷川家系譜は大正時代に中川忠順により紹介された。（土居前掲注6書20頁。）
- (11) 本法寺は小川通寺之内上ルにある日蓮宗寺院。永享8年（1436）日新が東洞院綾小路に創建、破却や焼失を経て、天正15年（1587）に現在地へ移転した。長谷川等伯が当寺十世日通と親交があり、塔頭教行院に寄宿したため、同院が長谷川家の菩提寺となった。
- (12) 信行寺は左京区仁王門通東大路西入ルにある浄土宗寺院。知恩院末で、当初は寺町丸太町にあったが宝永5年（1708）の大火後、現在地に移転された。「長谷川宗也考」前掲注6書参照。
- (13) 本資料は公刊されたものがないので、以下の通り序を翻刻する。

子家過去帳天明八戊申歲依火災燒亡^{ハツ}。故今茲^{ウツシ} [三] [欠] 捫^{イサ・カイタクツツイタクノ} 古過帳而騰^{ココロサシヨ}之。聊懷追悼之志以^テ先祖代々^{ナスオシシヤ}為恩謝^ト者也。

長谷川家代々宿坊次第之事。

等伯 日蓮宗也則小川頭本法寺塔内教行院。

宗也 - 等伯実子 - 慶安年中改宗為浄土宗、乃頂妙寺通東信行寺為宿坊。但シ明和年中迄。

等潤^{ヨウチ}幼稚之時川端八兵衛為養子。從九才時学画、養父母仕而不^{オコラカウカウ} 怠^{モロトモキユウセイ} 孝養。其後養父母諸共旧姓婦長谷川。其比宗旨有故及論、依之明和年中又寺町天性寺定宿坊者也。天明戊申火災前^{マデ}彼寺境内榮源院為宿坊、今ハ絶彼院也。

本 本法寺

信 信行寺

天 天性寺

戒名上以朱字本信天加三字、而知宿坊之為符文^ト者也。

- (14) 土居前掲注6書、212-3頁に影印翻刻がある。
- (15) 序は以下の通り。翻刻は新たに起こした。
此予カ家之系譜ハ、先乃宗雪筆ニテ、左に記せることク書代々傳へぬれとも、天明戊申大火の時焼失しけり。父等潤もあらまはは覺れとも、文を委しくハわかちかたし。然に父の姉精俊尼之方ニ、祖父宗清の筆にて、反古ごとき紙ニかき記し傳え置れし書あり。是お見て亦予カ写取て己カ家の系となし傳ふる者也。」
- (16) 宮島前掲注7書、94-96頁。
- (17) 中村溪男「発見された等伯系譜」（『MUSEUM』64号、東京国立博物館、昭和31年7月）11 - 13頁。
- (18) 序文は以下のとおり。
原卷は長谷川信次所有の処、大正拾貳年九月一日関東大震災のトキ焼失したが、等英妾腹の一子山崎喜作原卷の複写を所持せるを以て、信次後継者幸吉之を写し、此卷を作成す。昭和貳年九月壹日」
- (19) 天性寺は寺町通三条上ルにある浄土宗寺院。智恩院末で天正5年（1577）に創建された。
- (20) 海津天神社の《三十六歌仙図》の落款。寛永7年（1630）6月の年紀とともにこの款記がある。
- (21) 土居前掲注6書、140頁。
- (22) 等憶の養子宗伯（1637-1687）は名を信近といった。『古画備考』二十三に「長谷川宗伯信近」の項がある。
- (23) 長谷川宗伯雪鱧（1666 - 1724）、長谷川宗伯雪嶺（1755 - 1830）がいる。両者とも養子である。
- (24) 絵屋は中世末から近世初期にかけて主に世俗画制作を行った業者。仲家本系譜の等伯の項でもその工房を「にぎやかなる絵屋也」と称している。山根有三「絵屋について」（『美術史』48号、美術史学会、昭和38年3月）
- (25) 『本朝画史』巻第3 中世名品「等悦 畫大黒并雜圖、筆意學雪舟。」雪舟流として中世に分類されているが、この等悦は長谷川宗也と見るべきであろう。巻第4 専門家族「長谷川宗也 等伯之庶子也、世其家業、然

筆力不逮父、或其後裔至于今乎。」

- (26) 『本朝画史』巻第3 中世名品「僧等譽 専念宗之僧而居泉州堺津安養寺、學雪舟、畫鍾馗并雜図、得其名。」雪舟流として中世に分類されているが、この等誉は長谷川家の一人と見るべきである。
- (27) 前掲注6の宗也関係論文及び山根有三「葛に昆虫図屏風について」(『古美術』4号、三彩社、昭和39年3月)による。『扁額軌範』初編に祇園社の《大黒布袋角力図》あり、「明暦三丁酉仲春下浣／長谷川新之丞筆」とあり。『新修京都叢書』8巻(臨川書店、1968.4) 339頁。
- (28) 『扁額軌範』二編二冊に祇園絵馬所の《鍾馗図》あり、「享保十三戊申年五月吉祥日／願主自雪舟八代長谷川宇右衛門宗清六十歳筆」とあり。『新修京都叢書』8巻(臨川書店、昭和43年4月) 458・464頁。
- (29) 仙台市宮城野区二の森にある祥麟山伊達家墓所は、伊達慶邦後室をはじめとする伊達慶邦縁者子女の墓地。閑子が埋葬されたところは現在地よりやや南方の旧小田原村にあった。
- (30) 墓碑銘に「以明治八年乙亥六月二十七日病終卒寓居享年五十三年九閏月葬 陸前國宮城郡小田原邑祥麟山廣幡氏墓側従前其議也」とある。
- (31) 《太元帥明王図》『高野山の明王像』(高野山霊宝館、平成5年7月) 62頁に図版が掲載される。
- (32) 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(平成11年5月、総本山長谷寺文化財等保存調査委員会) 34頁。軸裏貼紙墨書に「自雪舟五代等伯七世孫／長谷川等叔藤原宗朝書(印)」とあるという。
- (33) 八幡社所有の絵馬「自雪舟十二代／長谷川等叔(印「越中岩瀬」)」の落款と、「奉納／文政五年壬午三月／右／榎屋庄治郎／敬白」の裏墨書あり。
- (34) 前掲注32書、185頁。
- (35) 高野山小田原にあった報恩院は中島坊報恩院といい行人方上通であった。高野山を訪れた松尾芭蕉との縁が伝えられる。明治維新に学侶方の普賢院と合併し中島坊普賢院となり現在に至る。普賢院に問い合わせたところ、旧報恩院墓地については不明であるとの回答であった。
- (36) 作者を掲載していないが、《愛染明王十七尊曼荼羅図》は『高野山の明王像』(高野山霊宝館、平成5年7月) 62頁に、《仁王経大曼荼羅図》は『Sacred Treasures of Mount Koya 高野山密教秘宝展』(Honolulu Academy of Arts, 2002) 66頁に図版が掲載されている。注31とともに高野山における長谷川家の仏画作品については高野山霊宝館の中安真理氏にご教示をいただいた。
- (37) 井谷善恵『近代陶磁の至宝 オールドノリタケの歴史と背景』(里文出版、平成21年1月) 103-111頁。
- (38) 2013年11月22日に仲春洋氏に面談し、聞き取りを行った。
- (39) 萩原盤山(1774-1846)は狩野派を学んだ町絵師で藩の絵事御用を受けることもあった(坂井正喜『会津人物事典 画人編』歴史春秋出版、平成元年12月。144・145頁)。憲海が住職を務めた喜福院の近くに住み、知己であった。
- (40) 前掲注32書、38頁。長谷寺に所蔵される絵画版本中に森田易信、森田易知の名が見える。
- (41) 日潮(1674-1748)は京都出身の日蓮宗の僧。長谷川等叔は文化12年(1815)に本法寺にある長谷川等伯の《涅槃図》を模写(仲家所蔵)しており、檀那寺ではなくなったものの、本法寺と長谷川家のつながりが断られたわけではなかった。
- (42) 《太元帥明王図》については前掲注31書107頁による。
- (43) 《愛染明王十七尊曼荼羅図》は、能満院旧蔵長谷川家関係粉本と同じ主題のものがあるが(表1-101)、金剛峯寺本は理趣経曼荼羅に準じて描かれた珍しい図像として別図をなしており、より深い図像への理解が必要となっている。前掲注31書103頁による。
- (44) 『京羽二重』巻6「絵仏師」の項(『新修京都叢書』巻2、臨川書店、昭和44年10月、204-5頁)。
- (45) 高井琮玄『佛画一 円山派下絵集1』(光村推古書院株式会社、平成9年5月) 106頁。
- (46) 小田慈舟「御室版二部曼荼羅の開版と其功労者」(『密宗学報』第178号、昭和3年6月) 290-291頁。
- (47) 両粉本とも会津から京都に入る途次、弘化2年(1845)に江戸の護国寺で模写したものである。《徳川家康(東照神君)像》(収蔵番号:130020680200)は貞享3年(1686)に七代了琢が制作した原画からの模写。《十二天像》(収蔵番号:130020422001-130020422010)は了琢による御筆本縮写からの模本で12枚のうち9枚が遺る。
- (48) 憲海入洛時の木村家当主は13代了琢徳綱であったが、その作に対しては、形式化が進むとする意見がある。大西芳雄「絵仏師木村了琢-東照宮深秘の壁画について」(『東京国立博物館紀要』第10号、昭和50年3月)。

付記

本稿をなすにあたり、快く資料の閲覧をお許しいただき貴重なお話をいただいた仲春洋様、貴重な情報をご教示いただいた高野山霊宝館の中安真理様、高野山真言宗別格本山普賢院様には、深く感謝の意を表すとともに厚く御礼を申し上げます。